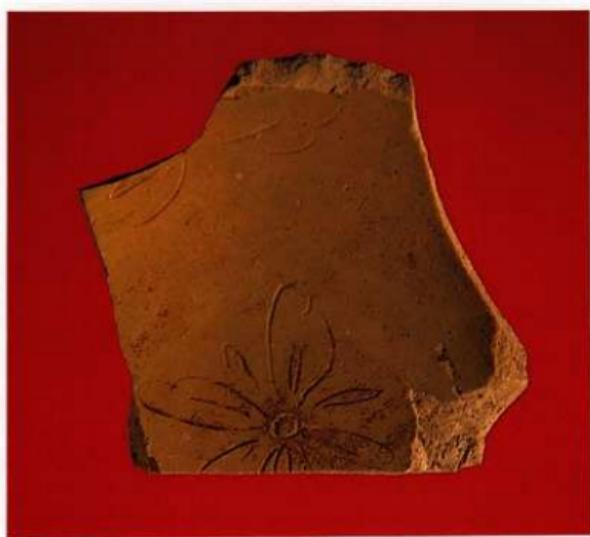


# 備後國府跡

—推定地にかかる第7次調査概報—

1989

広島県立埋蔵文化財センター



706 T 出土綠釉陶器

## 例　　言

- この概報は、昭和63（1988）年10月3日～11月26日に、府中市出口町及び府中町で実施した備後国府跡推定地の第7次発掘調査概報である。
- 発掘調査は、昭和63年度国補事業として広島県教育委員会が主体となり、広島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 発掘調査は、伊藤実・西村直城が行い、出土遺物の整理等は伊藤・西村のほか加藤和恵の協力をうけ、製図・拓影は若狭智恵・新本尚子が中心となって行った。また、この概報の執筆は、伊藤（I・V・VI）、西村（II～IV）が行い伊藤が編集した。
- この概報に使用した遺構表示記号は、SK（土塁）、P（柱穴）である。また、トンチ番号・遺構番号には3桁の番号を付け、上1桁の数字(7)は調査年次を示す。
- 土器の断面は、次のとおり区分した。  
須恵器（黒）、土師器（白）、縄釉陶器（濃いアミ目）、磁器（淡いアミ目）
- 第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（府中・井原）を、第2図は府中市都市計画図をもとに作成した。
- この概報の方針は、第1・2図を除いて磁北である。

## 目　　次

I	はじめ	(1)
II	位置と環境	(2)
III	調査の概要	(4)
IV	遺構	(6)
V	遺物	(12)
VI	まとめ	(32)

## 図 版 目 次

- |                           |                   |
|---------------------------|-------------------|
| 図版 1 a 調査区遠景（北東から）        | 図版 5 出土遺物 1       |
| b 調査区近景 辻横田地区（北東から）       | 図版 6 出土遺物 2       |
| 図版 2 a 701 T 遺構検出状況（北東から） | 図版 7 出土遺物 3（緑釉陶器） |
| b 702 T 遺構検出状況（北東から）      | 図版 8 出土遺物 4       |
| 図版 3 a 703 T 遺構検出状況（南西から） | （上：緑釉陶器、下：中国製磁器）  |
| b 704 T 遺構検出状況（北東から）      |                   |
| 図版 4 a SK 710検出状況（北西から）   |                   |
| b SK 725遺物出土状況（北西から）      |                   |
| c 同上（北東から）                |                   |

## 挿 図 目 次

- |  |
|--|
| 第1図 周辺主要遺跡分布図（1:50,000 府中・井原）                      |
| 第2図 昭和63年度トレンチ位置図（1:2,500）                         |
| 第3図 701~703 T 遺構実測図（1:80）                          |
| 第4図 SK 710・SK 725（701 T）実測図（1:30）                  |
| 第5図 704・705 T 遺構実測図（1:80）                          |
| 第6図 706・708~710 T 土層実測図（1:80）                      |
| 第7図 701 T（SK 725）出土土器実測図（1:3）                      |
| 第8図 701 T（柱穴・包含層上層・包含層下層）出土土器実測図（1:3）              |
| 第9図 701 T（包含層下層）、703 T（P 1）、702 T（包含層）出土土器実測図（1:3） |
| 第10図 703 T（包含層）、704 T（包含層）出土土器実測図（1:3）             |
| 第11図 705 T（包含層）、706 T（包含層）出土土器実測図（1:3）             |
| 第12図 706 T（包含層）出土土器実測図（1:3）                        |
| 第13図 706 T（包含層）出土土器実測図（1:3）                        |
| 第14図 706 T（包含層）出土土器実測図（1:3）                        |
| 第15図 各トレンチ出土土製品（1:2）・瓦類実測図（1:3、1:6）                |

## I. はじめに

備後国府跡の所在地については、從来から国分寺等の所在地から深安郡神辺町湯野に比定する説（神辺説）と『倭名類聚抄』の「国府在葦田郡」の記載から府中市内とする説（府中説）及び両説を折衷した移動説など多くの研究者によって諸説が唱えられてきた。

一方、福山市及び府中市を中心とする地域が、昭和38（1963）年に備後工業整備特別地域に指定されるなど、にわかに備後國府推定地が開発の波をかぶる事態が憂慮された。このような経過の中で、開発事業が具体化しつつあった神辺町湯野町地区で、昭和49（1974）年以降発掘調査が断続的に実施されたが、国府の遺構は確認できなかった。そこで、広島県教育委員会では、昭和57（1982）年度から府中市街地において、国府確認の発掘調査を実施することとなった。調査は、昭和57年度は広島県教育委員会文化課、昭和58（1983）年度以降は広島県立埋蔵文化財センターが担当している。本年度は第7次発掘調査として府中市出口町及び府中町で実施した。

調査主体 広島県教育委員会

調査担当 広島県立埋蔵文化財センター

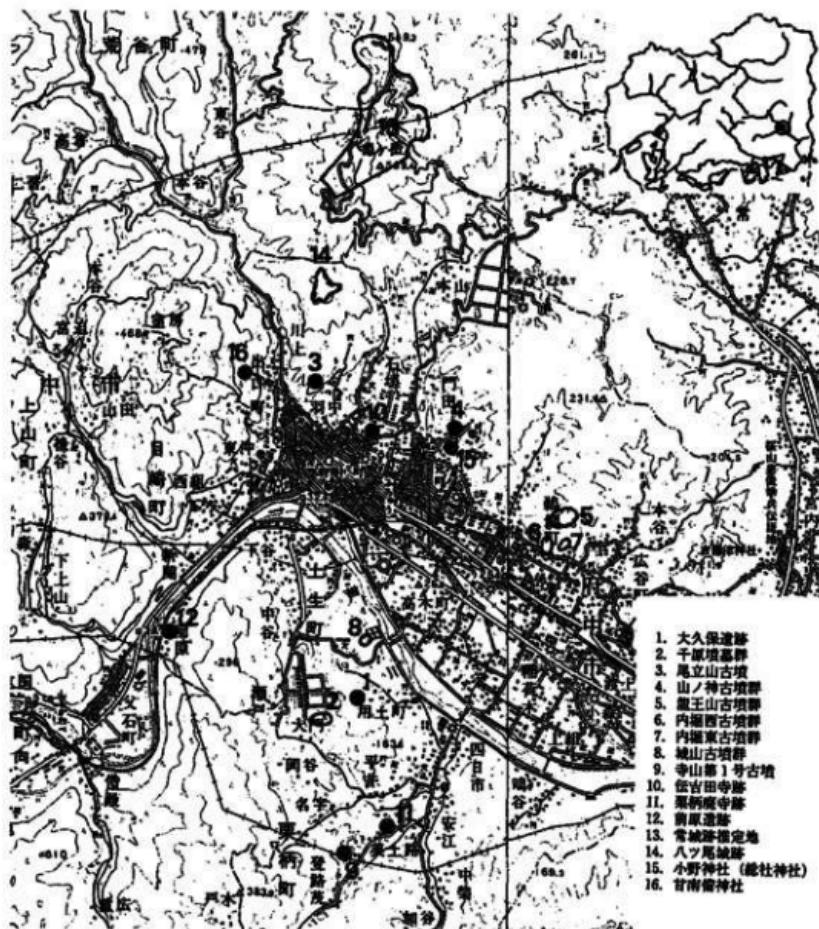
調査期間 昭和63年10月3日～11月26日

調査経費 400万（内、国庫補助金200万）

現地での発掘調査については、潮見浩（広島県文化財保護審議会委員・広島大学教授）松下正司（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所長）・岩本正二（同専門員）の各氏、出土遺物の検討等については、浅田員由（愛知県陶磁資料館）、安田幸市（愛知県三好町立歴史民俗資料館）、百瀬正恒（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、山田邦和（京都府京都文化博物館）、中井貞夫（大阪府立泉北考古資料館）・小林義孝（同）・宮野淳一（同）、森田稔（神戸市立博物館）、佐藤昭嗣（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所）、鈴木康之（同）の各氏から有益な御指導を頂いた。また、調査にあたっては、府中市役所、府中市教育委員会、市立和光園保育所から多大の協力をうけ、特に高橋孝二（府中市史編纂室）、梅田良三（府中市教育委員会）・篠原正治（同）の各氏には調査全般にわたってお世話になった。さらに、発掘調査地の土地所有者、田口キクエ、延藤重一郎、小森山エリコ、栗本晃吉の各氏や調査に参加された地元の方々からは多大の協力をうけた。深く感謝します。

## II. 位置と環境

府中市は広島県南東部の内陸地帯に位置し、市域の大半を占める標高400~700mの連山に三方を囲まれている。かつて氾濫を繰り返した芦田川が西北から南東へ貢流しており、流域の平野部に市街地が位置している。



第1図 周辺主要遺跡分布図 (1:50,000 府中, 井原)

府中市街地周辺の遺跡を概観すると、弥生～古墳時代の遺跡としては、芦田川南岸の丘陵上に位置する大久保遺跡等の集落跡や、墳墓・古墳で形成される千原墳墓群が存在する。<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup> 市街地周辺の丘陵上には、尾立山古墳、<sup>(3)</sup> 山ノ神古墳群、<sup>(4)</sup> 龍王山古墳群、内堀西古墳群、<sup>(5)</sup> 内堀東古墳群、城山古墳群、寺山第1号古墳等、箱式石棺・土塚等を内部主体とする古墳時代前半期の古墳が存在する。古墳時代後半期に属するものは少ない。

古代の遺跡としては、市街地縁辺に寺院跡が2箇所知られている。元町の伝吉田寺跡は、府中町の本年度調査区より約100m東に位置している。藤原宮式の軒丸瓦及び川原寺創建時のものに酷似する軒丸瓦が出土しており、東に金堂、北に講堂を配した法起寺式の伽藍配置であったことが明らかになっている。栗柄町の栗柄廃寺跡は、芦田川南岸の丘陵に位置しており、伝吉田寺跡と共に軒丸瓦・軒平瓦が出土している。伽藍配置は不明であるが、伝吉田寺跡との密接な関係が考えられる。さらに市街地から芦田川を逆上った父石町には、伝吉田寺跡と共に奈良時代前半の軒丸瓦・軒平瓦や土馬が出土した前原遺跡が存在し、草団跡か駅家跡と推定されている。<sup>(6)</sup>

府中市街地北方の亀ヶ岳は、「統日本紀」に記載のある朝鮮式山城とされる常城跡と推定されている。<sup>(7)</sup> 亀ヶ岳の南側には、建仁年間（1201～1203）に備後国守護杉原光平によって築かれた八ツ尾城跡が存在する。また遺跡ではないが、元町の丘陵部には備後国総社に比定される小野神社が、出口町の三室山南麓には「延喜式」神名帳に記載のある「賀武奈<sup>カムナ</sup>備神社」に比定される甘南備神社がある。

## 註

- (1) 広島県府中高等学校地歴部「府中高校所蔵考古資料（県内出土）目録」第8号 昭和55（1980）年。
- (2) 鹿坂光彦・河内秀史「府中市千原古墳の石棺」「芸備」第6集 芸備友の会 昭和53（1978）年。
- (3) 鹿坂光彦「府中市中須町大字御旅出土の鏡」「芸備」第3集 芸備友の会 昭和50（1975）年。
- (4) 府中市教育委員会「府中・山ノ神1号古墳発掘調査報告書」昭和58（1983）年。
- (5) 寺山遺跡発掘調査団「広島県府中市寺山遺跡発掘調査報告書」昭和43（1968）年。
- (6) 広島県教育委員会「伝吉田寺跡発掘調査概報」昭和43（1968）年。
- (7) 立元国「備後常城の調査」「奈良時代山城の研究」府高学報 昭和43（1968）年。

### III. 調査の概要

#### 1. 既往の調査

年次調査以前の府中市街地の調査としては、昭和55（1980）年10月に府川町の府中市文化センターの試掘調査、昭和57（1982）年6月に鵜飼町の広谷小学校プール建設予定地の試掘調査が行われた。前者の調査では中世の遺物が、後者の調査では弥生土器が出土したもの、国府に関連する時代の遺構・遺物は検出できなかった。

昭和57年度からは国府の所在及び範囲確認のための年次調査が始まった。

第1次調査（昭和57年度）は広谷町と鵜飼町で実施し、鵜飼町西田、コモ原、町田、大高田地区で奈良～平安時代の包含層を確認したが、遺構は確認できなかった。

第2次調査（昭和58年度）は鵜飼町で実施し、寺の下西・広田・服部・寺ノ前地区で弥生～鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。特に寺ノ前地区では、奈良～平安時代の倉庫らしき掘立柱建物跡を検出し、柱穴から陶碗が出土した。

第3次調査（昭和59年度）は元町で実施し、マエ地区で弥生～古墳時代の遺構と遺物を検出し、明ゼン・ツジ地区で奈良～平安時代の掘立柱建物跡の遺構と、綠釉陶器等の遺物を検出した。特にツジ地区で検出した掘立柱建物跡は、出土した遺物と共に国府との関連の強い遺構である可能性を示している。

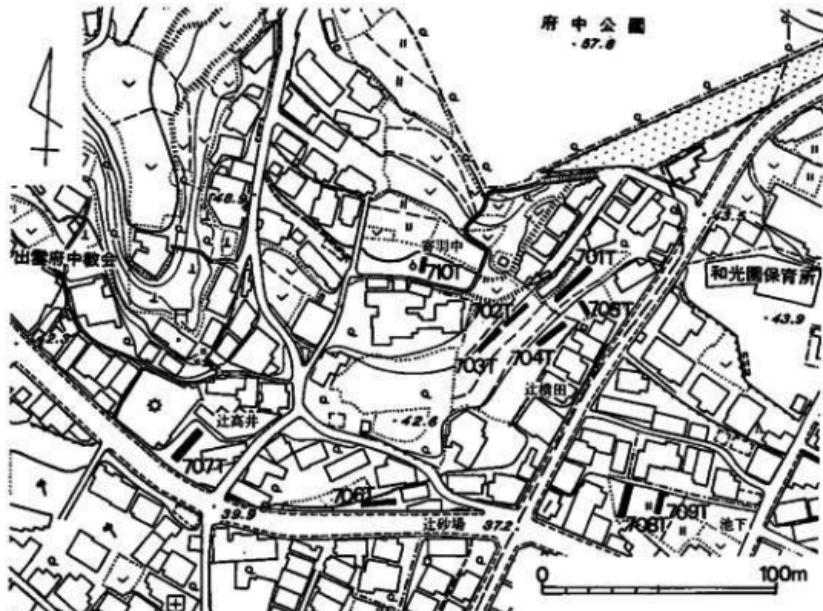
第4次調査（昭和60年度）は元町で実施し、前年度の調査区であるツジ地区に隣接するワキ地区で奈良～平安時代の柱穴・溝を検出した。砂山地区では奈良～平安時代の柱穴の他、平安時代の井戸を検出し、木簡や青磁・白磁を含む多量の遺物が出土した。

第5次調査（昭和61年度）は元町で実施し、市街地北方の低丘陵上の片岡地区で縄文時代～中世の遺構が検出され、新角メン地区では奈良～平安時代の包含層を確認し、ホリノ河内地区では中世の包含層を確認した。

第6次調査（昭和62年度）は元町で実施し、砂山地区で平安時代～中世の掘立柱建物跡・土器溜・瓦溜・井戸・溝状遺構等の多数の遺構と遺物を検出した。特に土器溜からは多量の一括した遺物が出土した。またその下層からは、弥生～古墳時代の包含層や溝等を確認した。松原地区では、奈良～平安時代の柱穴・土塙・溝状遺構等を検出し、奈良～平安時代の遺物が多量に出土した。

## 2. 本年度の調査

本年度は出口町の辻横田地区・辻砂場地区・辻高居地区・寄羽中地区、府中町の池下地区で調査を実施した。辻横田地区では、701T～705Tを設定した。その結果、701Tでは平安時代の土塙・中世の柱穴群、奈良時代～中世の包含層などを検出した。702・703Tでは、奈良～平安時代の柱穴群などを検出した。704Tでは古墳～平安時代の柱穴を、705Tでは中世以降の柱穴を検出した。辻砂場地区では、706Tを設定した。遺構は検出されなかったが、奈良～平安時代の遺物包含層を確認した。辻高居地区では707Tを設定したが、遺構や遺物は確認できなかった。池下地区では、708・709Tを設定した。708Tでは、旧河川の堆積と考えられる砂層を確認した。709Tでは、近世以降の土塙を検出したが、国府に関連する遺構や遺物は確認できなかった。寄羽中地区では、710Tを設定したが、遺構や遺物は確認できなかった。また元町の砂山地区では、府中市埋蔵文化財調査団が都市計画街路建設に伴う調査を実施し、奈良～平安時代の倉庫跡と考えられる掘立柱建物跡や、柱穴群・井戸・溝などを検出している。



第2図 昭和63年度トレンチ位置及び周辺地形図 (1:2,500)

## IV. 遺構

### 1. 辻横田地区

#### 701T (第3図)

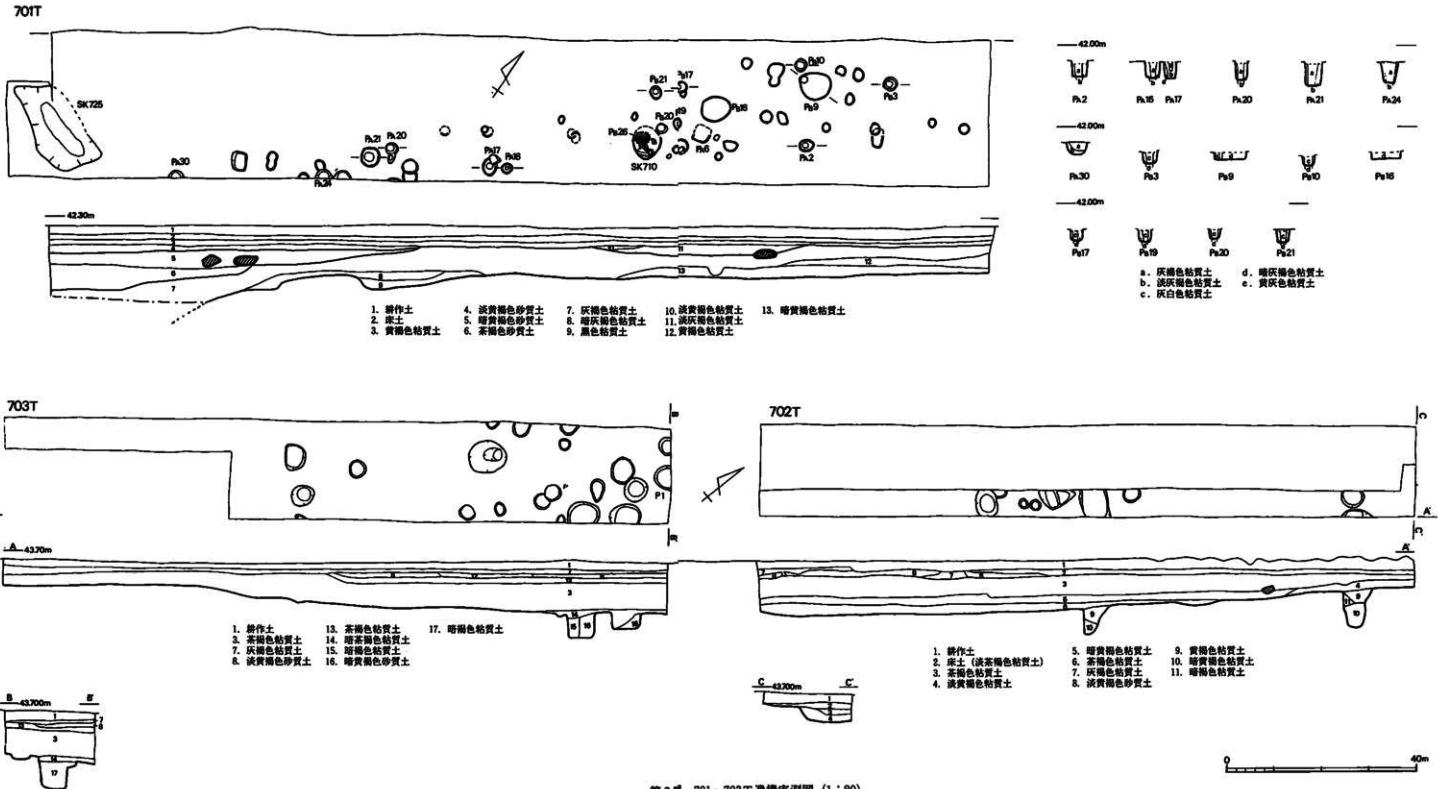
土層堆積状況は、トレンチ北東側においては、基本的に第1層（耕作土）、第2層（床土）、第3層（黄褐色粘質土）、第7層（灰褐色粘質土）となる。第7層が地山に接する部分と、間に1～2層入る部分がある。第7層は地山と共に南へ傾斜しており、トレンチ南西側では、第3層と傾斜する第7層の間に第4層（淡黄褐色砂質土）、第5層（暗黄褐色砂質土）、第6層（茶褐色粘質土）が入っている。遺構は第3層で土塙（SK710）、柱穴群（PA群）、トレンチ中央から北東側の第7層で柱穴群（PB群）、トレンチ南西端の第5層で土器溜（SK725）を検出した。柱穴の埋土はPA群が淡灰褐色粘質土、PB群が暗灰褐色粘質土である。PB群は第7層の中程で検出しているが、実際にはより上層から掘り込まれた可能性がある。出土遺物からはPA群とPB群に明確な時期差は見られない。第7層は古墳時代を中心とする包含層である。

SK710 (第4図) 平面形は円形に近く、直径61～64cm、検出面からの深さ18～20cmであり、第3層に掘り込んでいる。埋土は炭化物と黄色ブロックが混入した灰褐色粘質土で、埋土上層には拳大～人頭大の自然石が投入されている。石の間から銅錢の破片が出土した。SK710の下から、直径28～38cm、現存の深さ約25cmの柱穴（PB26）を検出した。埋土は暗灰褐色粘質土でPB群の柱穴の埋土と同じであるが、土層断面の観察からSK710は、PB26の埋没後に掘り込んだものと考えられ、柱穴よりもやや時代は下ることになる。

SK725 (第4図) 長さ174～206cm、幅98～110cm、現存の深さ最大18cmの浅い土塙である。第5層に掘り込んでおり、埋土は炭化物が多量に混った暗黄褐色粘質土である。土器は土師器の皿が多数を占めている。

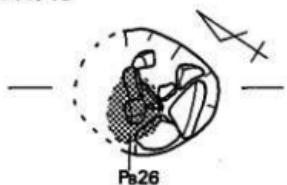
#### 702T (第3図)

土層堆積状況は、第1層（耕作土）、第2層（床土）、第3層（茶褐色粘質土）、第5層（暗黄褐色粘質土）、第6層（茶褐色粘質土）となる。トレンチ北東側では、第3層の下に第4層（淡黄褐色粘質土）が入っており、南西側では床土が異っている。第3～6層は奈良～平安時代の遺物包含層である。トレンチ南東壁より約1.5mの幅で掘り下げたところ、トレンチ北東側と中央で地山を掘り込んだ柱穴を検出した。特に南へ傾斜する地山が平坦になるトレンチ中央で、柱穴を集中して検出した。埋土は暗黄褐色粘質土である。

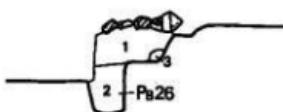


### 第3図 701-703T遺構実測図 (1:80)

SK710

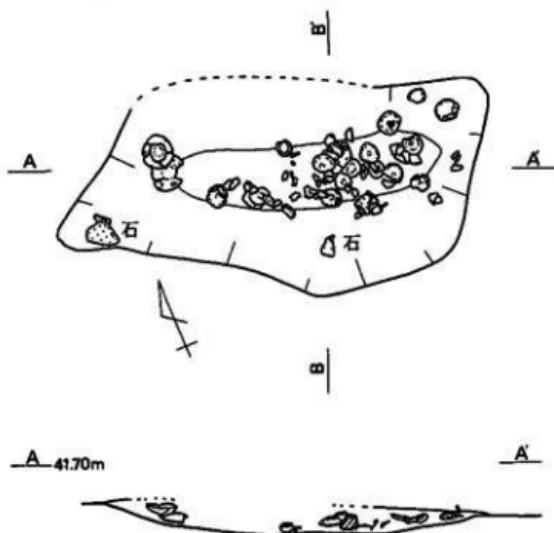


— 42.00m —



1. 暗褐色粘質土
2. 暗灰褐色粘質土
3. 黄褐色粘質土

SK725



第4図 SK710, SK725 (701T) 遺構実測図 (1:30)

### 703 T (第3図)

702 Tの南西の延長線上に、約2m離して設定した。土層堆積状況は、基本的に702 Tと同じであるが、第3層が地山に接しており、耕作土の下に第7、8、12、13層（灰褐色系土）が入っている。トレンチ南西側から東へ傾斜する地山は、トレンチ中央から北東側にかけては平坦になり、702 Tの地山が平坦な部分へと続いている。この平坦部で、702 T同様に地山を掘り込んだ柱穴群を検出した。特にトレンチ北東端で、多数の柱穴を検出した。北東端の柱穴は、深さが702 Tの平坦部の柱穴に近いものが多く、両者の繋がりが考えられる。702 Tの柱穴の全貌は不明であるが、702 Tから703 Tの地山平坦部に、掘立柱建物が建っていた可能性がある。

### 704 T (第5図)

トレンチ北東部においては、第1層（耕作土）、第2層（床土）、第3～5層（茶褐色系粘質土）、第6層（暗灰褐色粘質土）がほぼ水平に堆積しているが、南東側では第5層の下に第7層～16層が北東へ傾斜するように堆積している。第4～5層は平安時代を中心とする時期の遺物包含層であり、第6～16層は古墳時代の遺物包含層である。遺構は第6層及び第12層を掘り込んだ柱穴を検出した。埋土は淡茶褐色粘質土である。

### 705 T (第5図)

土層堆積状況は、第1層（耕作土）、第2層（床土）、第3層（暗灰褐色粘質土）、第4層（茶褐色粘質土）、第5層（暗灰褐色粘質土）となり、南西へ緩やかに傾斜している。遺構は第4層を掘り込んだ柱穴を検出した。埋土は淡灰褐色粘質土である。柱穴は傾斜面上に位置しており、検出面及び底面のレベルは柱穴ごとに異なる。第5層が平安時代の遺物包含層であり、柱穴は中世以降のものと考えられる。

## 2. 辻砂場地区

### 706 T (第6図)

土層堆積状況は、トレンチ西側においては、第1層（耕作土）、第2層（床土）、第4層（暗茶褐色粘質土）、第7層（暗褐色粘質土）となるが、一部第7層の上に第6層（黒褐色粘質土）が薄くのっている。東側では第4層上面が削られ、やや複雑な土層になっている。地山は東へ傾斜している。第4層は奈良～平安時代の遺物包含層であり、多量の遺物が出土しており、土器類や炭化物を多量に含んでいる。第7層は弥生土器の破片が出土したが、遺物はほとんど包含していない。遺構は検出できなかったが、第6～7層が遺構面である可能性が高い。

### 3. 下高居地区

707T

トレンチ南西側から中央にかけては、第1層（茶褐色粘質土）、第2層（灰褐色粘質土）が地山の上に堆積しているが、北東側は地山がほとんど露出しており、地山が削平されたものと考えられる。遺構や遺物は確認されなかった。

### 4. 池下地区

708T（第6図）

遺構は検出できなかったが、第1層（耕作土）、第2層（床土）、第3層（暗褐色土）の下は、砂層を中心に堆積していることを確認した。第5～11層は南へ緩やかに傾斜・堆積しており、特に第6層（淡茶褐色砂質土）と第9層（暗灰褐色粘質土）は、砂質土層のなかに石を混入しており、第9層には多量の石が混入している。このような土層堆積状況から、708Tの位置はかつて川であったと考えられる。現在708Tの東側約50m離れた道路の地下を南流する川が、この位置を流れていた可能性がある。第3層で近世以降の遺物が出土していることから、川が埋没した時期は近世以降と考えられる。

709T（第6図）

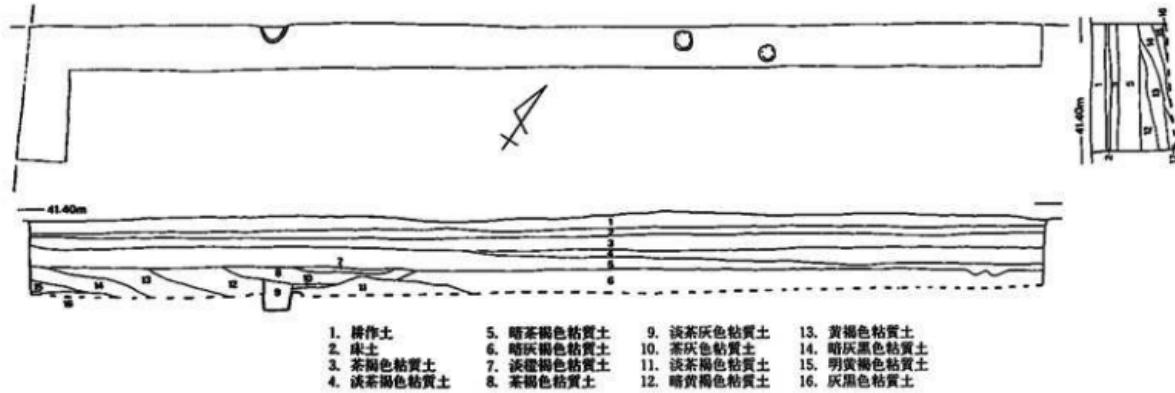
708Tの約12m東に設定した。土層堆積状況は、トレンチ北側においては、第1層（耕作土）、第2層（床土）となるが、南側では第2層の下に第3層（暗橙色粘質土）、第4層（暗茶褐色粘質土）、第5層（淡灰褐色粘質土）が堆積しており、地山は南へ傾斜している。遺物は二次堆積したものを除いて近世以降のものであり、土層堆積状況から地山が近世以降に削平されたものと考えられる。遺構は北側で地山に掘り込んだ土塙を検出した。

### 5. 寄羽中地区

710T（第6図）

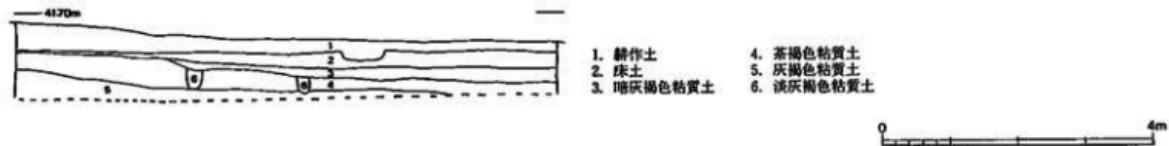
土層堆積状況は、第1層（耕作土）、第2層（床土）、第3層（暗茶褐色粘質土）、第4層（暗褐色粘質土）、第5層（茶褐色砂質土）となり、トレンチ南側では第3層の下に第6層（暗灰褐色粘質土）が入る。第3層以下は、砂・礫が多量に混入しており、遺構・遺物は確認できなかった。

704T

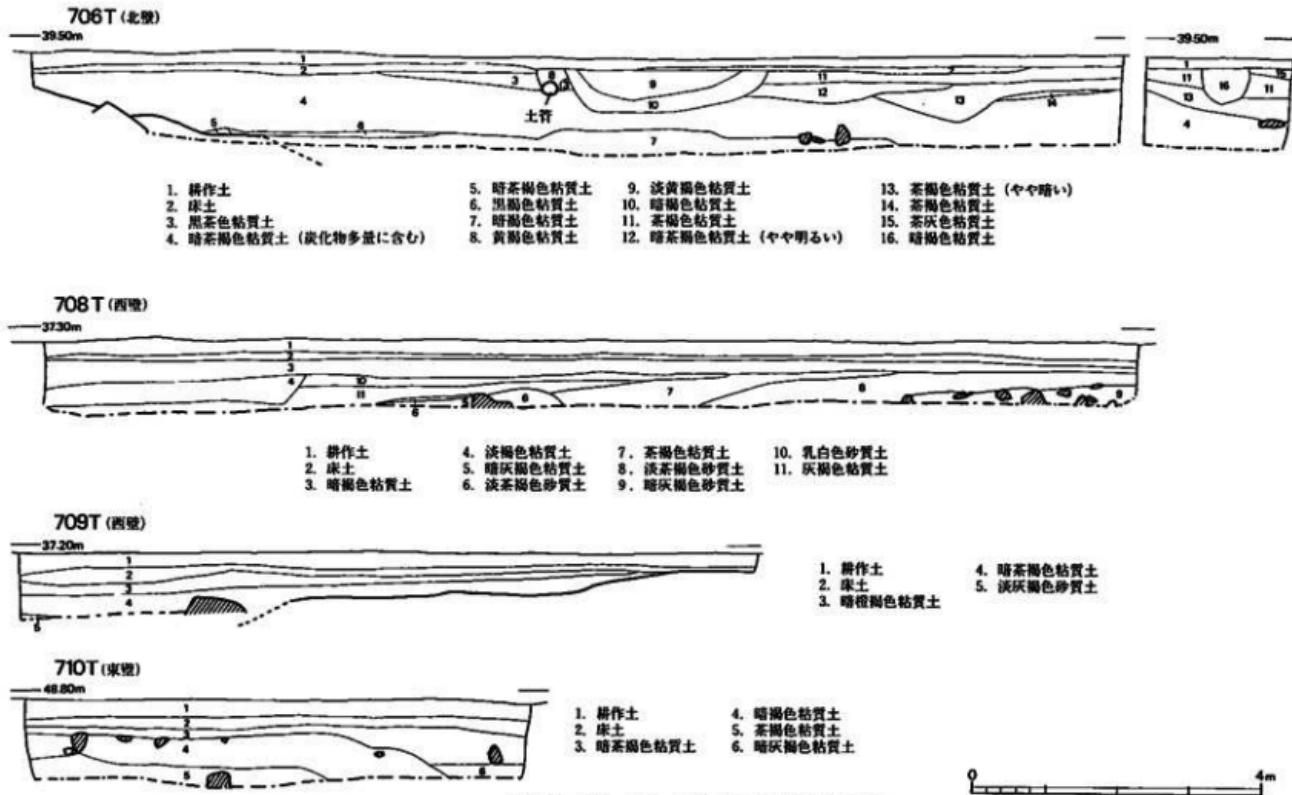


- 10 -

705T (北京鐵)



第5圖 704・705T 遺構実測図 (1:80)



### 第6圖 706・708~710T 土層実測図 (1:80)

## V. 遺物

今回の調査では、古墳時代から平安時代にかけての土器類が比較的まとまって出土した。これらの中でも、701TのSK725や706Tの包含層出土の資料など平安時代のものが目立った。特に、706Tの陰刻花文を施す綠釉陶器などが注目される。個々の土器については、観察表を作成したが、ここでは701・706Tの資料を中心に、分類基準や概要を簡単に記すこととする。

### 1. 土器類

#### 701T

SK725（第7図1～34）　浅い土壇状の掘込の中から、須恵器椀A類（1・2・4）・椀B類（3）、土師器皿A1-a類（5～11）・A1-b類（12～23）・A2類（24～31）・羽釜形土製品（32）・椀（33）、黒色土器（34）が一括して出土した。このなかで、須恵器椀、土師器皿については、701Tの柱穴内や包含層上層（3層～4層）から出土したものを含めて、次のように分類した。

須恵器 梗A類（高台をもつもの）

　　梗B類（高台をもたないもの）

土師器 皿A類（口径8～10cmの小皿）—A1（底部ヘラ切り）—A1-a（口縁部直線的なもの）  
　　A1-b（口縁部が内彎して、底部と口縁部の境が不明瞭なもの）  
—A2（底部糸切り）

　　皿B類（口径5～7cmの極小皿）

以上のなかで、須恵器椀A類の高台には断面逆台形のもの（1）と逆三角形のもの（4）があり、後者は土師器椀（33）の高台と類似している。また、この（1）と（33）は形態的にも類似点が多く、ともに手本となった土器が同一であることが考えられる。土師器皿については、底部ヘラ切りと糸切りが混在しており、前者は形態的に2つのタイプに分かれる。後者には、前者にないタイプとして底部の比較的小さなものの（29・30）の存在が指摘できる。羽釜形土製品については、類例が少なく断定はできないが一種の祭祀用品として製作されたものと考えられる。黒色土器は、いわゆるA類と呼ばれる内面のみを黒色にしたもので胎土が灰白色を呈し砂粒が少なく、畿内方面からの搬入品である可能性も考えられる。

PB16 (第8図35) 土師器皿B類で、器壁が極めて薄い。

PB26 (第8図36) 土師器皿B類である。

PA6 (第8図37) 土師器杯で、底部を欠いている。

包含層上層 (第8図38~52) 3~4層から数在して、須恵器碗A類 (38)、土師器皿B類 (39~43)・A1-b類 (44・45)・A2類 (46)・杯 (47)・碗 (48)、中国製白磁四耳壺 (49)、龍泉窯系の青磁碗 (50~52)などが出土した。

これら柱穴や包含層上層の土器群は、SK725のものに比べて中世的なものが多く、須恵器碗A類、土師器皿A1-b類・A2類を除いて、SK725より時期的に下るものと考えられる。龍泉窯系の青磁については、大宰府編年のI~4類 (50・51)、I~5類 (52)にあたり、<sup>(1)</sup>12世紀中葉~13世紀中葉に位置づけられている。

包含層下層 (第8図53~56、第9図57~68) 柱穴群やSK725などの基盤となってい  
る5~7層から出土したもので、須恵器壺 (53・55・56)・壺 (54)・蓋 (58~62)・杯  
(63~65)・高杯 (66)、土師器高杯 (67)・壺 (68)などがある。これらのなかで、量  
的に多い須恵器についてみれば、陶邑編年のII型式6段階 (58・59・63)からIV型式3~  
4段階 (64)までのものがみられ、年代的には7世紀初頭から8世紀末までの幅がある。

以上、701Tの土器群は若干の混入遺物を除いて、年代的には包含層下層→SK725→柱  
穴群・包含層上層と推移しているとみて大過なかろう。

## 702T

包含層 (第9図70~79) 地山上に堆積した3~6層から須恵器壺 (70)・杯 (71~73)・  
碗 (74)・高杯 (75~77)、土師器碗 (78・79)などが出土した。平安時代後半頃のもの  
が多い。

## 703T

P1 (第9図69) 須恵器蓋が1点出土した。奈良時代のものである。

包含層 (第10図80~86) 地山上に堆積した3層 (702Tの3~6層に相当)から出土  
したもので、須恵器壺 (80)・蓋 (81)・杯 (82~85)、中国製白磁 (86)などがある。  
奈良時代後半~平安時代前半のものが多いが、85は高台の形態が綠釉陶器に類似しており、  
これを模倣した須恵器である可能性を考えられ、平安時代後半期のものであろう。これに  
関連して、中国製白磁は大宰府編年のII~III類に相当し、平安時代後半期に盛行するもの  
<sup>(2)</sup>であるとされる。

#### 704 T

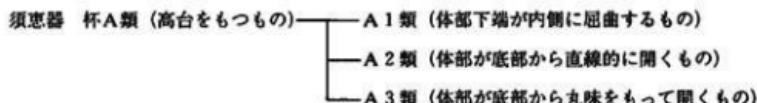
包含層（第10図87～98） 3～6層に相当する堆積土から、古墳時代から平安時代にかけての土器が出土した。調査区が他のトレンチより低位置にあるため、時代幅のある土器が混在しているが、古墳時代の土器は比較的下層の5～6層から出土した。土器には、須恵器壺（87）・蓋（88・89）・杯（90～92）・椀（93～95）・高杯（96）、土師器甕（97）・甌（98）などがある。このなかで蓋とした89の須恵器は、逆転して圈台のつく盤であった可能性が考えられる。

#### 705 T

包含層（第11図99・100） 5層から出土した須恵器蓋（99）・杯（100）である。奈良時代のものである。

#### 706 T

包含層（第11図101～120、第12～14図） 4層を中心に出土した土器群で、須恵器鉢（101）・杯A1類（102～111）・杯A2類（112～115）・杯A3類（116～120）・椀（121～125）・杯B類・皿（128）・盤（129～132）・蓋A類（133）・蓋B類（134～146）、土師器杯A類（147～157）・杯B類（160～170）・皿（171・172）・椀（173～175）・甕（176・177）、黒色土器（158・159）、綠釉陶器（178～191）など多様な土器類が出土した。これらの中で、須恵器杯・蓋・土師器・杯については、形態的に次のように大別した。



杯B類（高台をもたないもの）

蓋A類（縁部屈曲部以下が長く、いわゆる壺蓋となるもの）

蓋B類（縁部屈曲部以下が短く小さなもの）

土師器 杯A類（高台をもつもの）

杯B類（高台をもたないもの）

今回、比較的まとまって出土した綠釉陶器については、種々のものがあるが、器形的には椀（178・186・188～191）・皿（179～185・187）がほとんどで、図示していないものなかに高台のつく小皿が1点ある。高台部の残っているものは、削出高台のもの（179～181・183～185）と貼付高台（186・187）の二者がある。高台内の外底面に釉薬をかけ

るもの（179～181）とかけないもの（183～187）があり、後者には内底面に直接重ね焼きの痕跡をのこすもの（185）がみとめられる。これら縁釉陶器の產地については、削出高台や胎土・釉の色調などから京都産と考えられるもの（179～185・189～191）が大部分で、その他に貼付高台をもつ近江産と考えられるもの（178・186～188）がある。京都産と考えられるもののうち、陰刻花文を施すもの（179～181）は、その文様の特徴から京都・洛西の大原野古窯跡群一帯で生産されたものによく似ている。

## 2. 土 製 品

**土鍤**（第15図192～201） 細長い筋錐形を呈する土鍤で、赤褐色を呈し成形・焼成とも良好である。平均重量7.0g（最小2.7g～最大12.4g）である。701T（192）、704T（193）、705T（194～198）、706T（199～201）から出土した。

**有孔土器**（第15図202） 702T表土から出土したものであるが、701TSK725出土の土鍤器・皿A1-b類の底部に穿孔したものである。穿孔は、焼成前に行なわれており、製作当初から特殊な用途を意図して作成されたものであろう。用途の可能性としては、孔に竹等を挿入して燭台としたものか、紡錘車の代用品などが考えられる。

## 3. 瓦 類

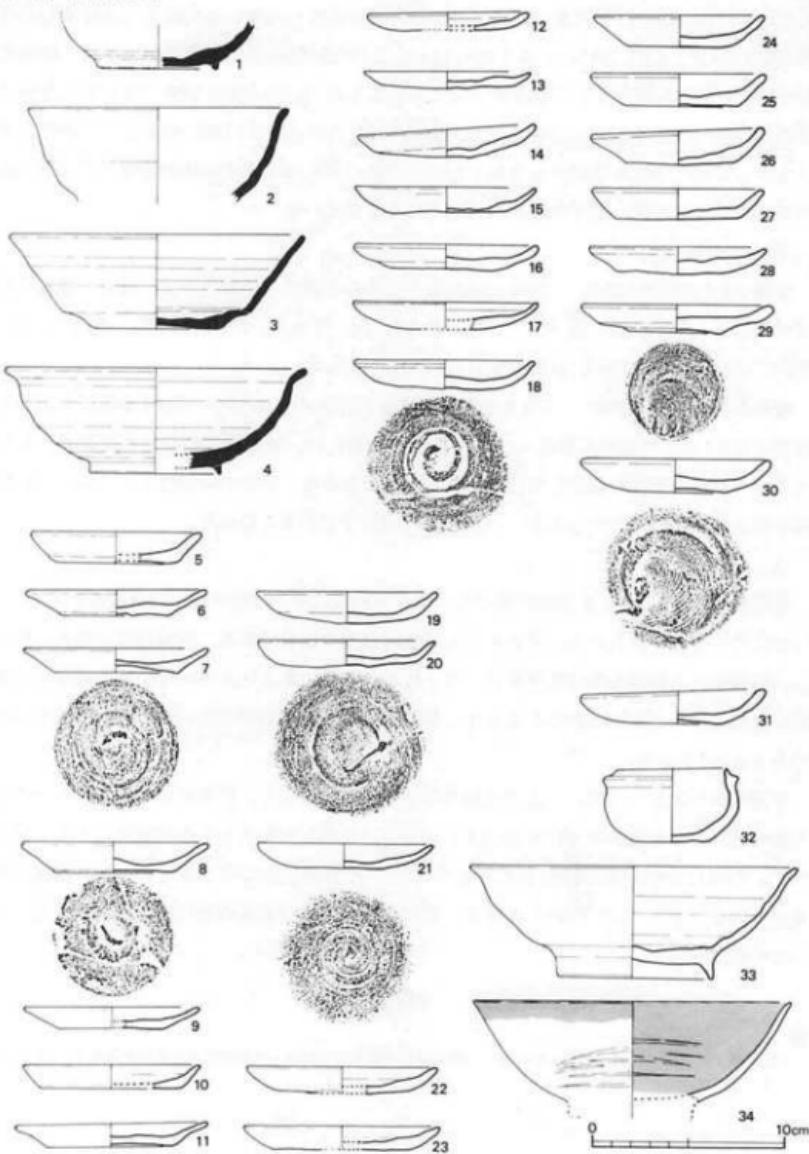
**軒平瓦**（第15図203）瓦当部の破片で、上・下外区にやや間隔のあいた珠紋をめぐらし、内区に均正唐草文を入れる。黒色を呈し、焼成はやや軟質である。平城宮6710型式に類似し、同様の瓦当紋様をもつ軒平瓦は、出土地点の直近にある伝吉田寺跡や栗柄廃寺父石遺跡、鷄飼遺跡など府中市内のみならず、備後地方の山陽道沿いに強い分布圏を形成する瓦である。705T出土。

**平瓦**（第15図204～207） 凸面に繩目叩きを明瞭にのこし、凹面には布目压痕がのこる平瓦の破片で、他に破片が20片余出土している。凸面・凹面とも2次調整はほとんど施されず、凹面に糸切り痕が観察されるもの（204）や棹板压痕ののこるもの（204・206）棹板压痕のないもの（205・207）がある。他に、玉縁をもつ丸瓦の破片も若干みられる。すべて706T出土。

### 註

- (1) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集4 1978年。
- (2) 註(1)と同じ。

701T (SK725)



第7図 701T (SK725) 出土土器実測図 (1:3)

## 701 T (PA16)



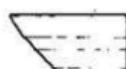
35

## 701 T (PB26)



36

## 701 T (PA6)



37

## 701 T 包含層上層



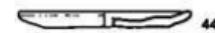
38



39



40



41



42



43



44



45



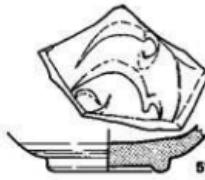
46



47



48



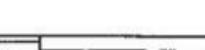
49



50

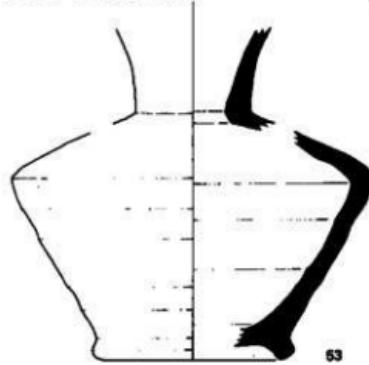


51



52

## 701 T 包含層下層



53



54



55

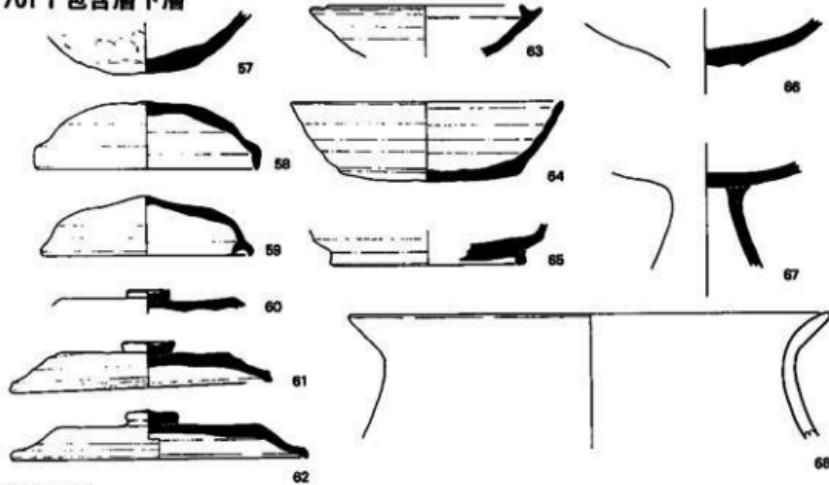


56

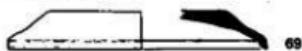
0 10cm

第8圖 701T(柱穴, 包含層上層, 包含層下層)出土土器實測圖(1:3)

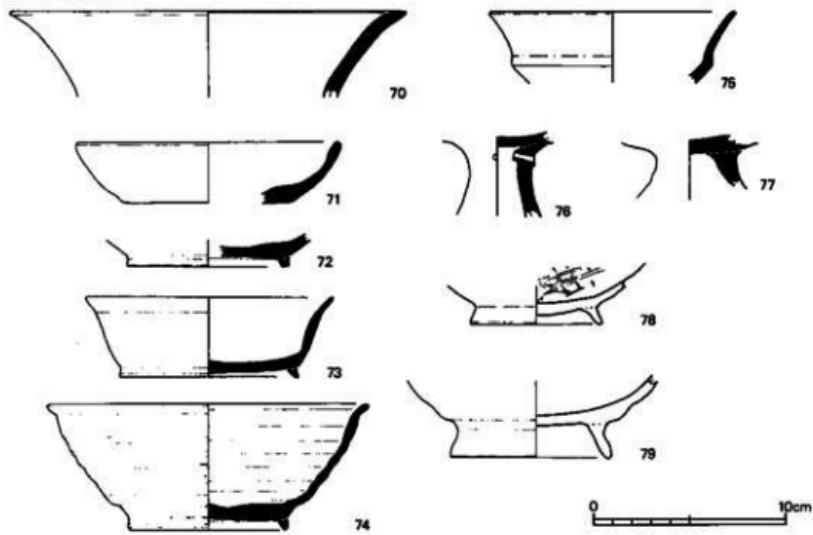
701 T 包含層下層



703 T P1

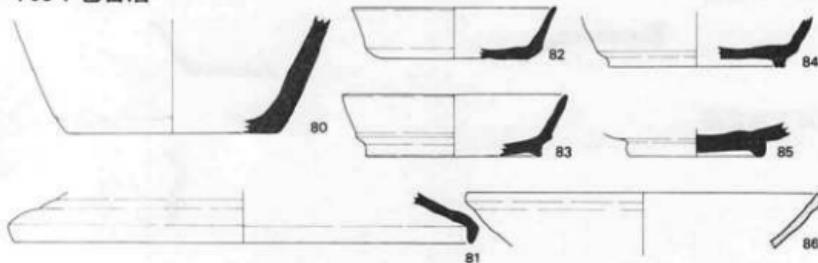


702 T 包含層

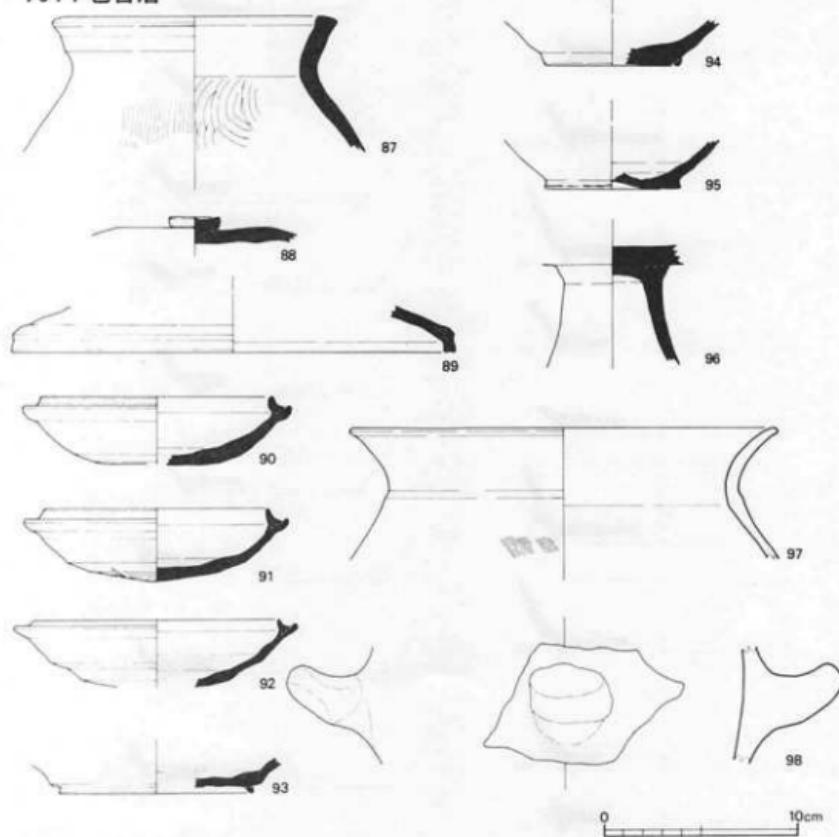


第9図 701 T (包含層下層), 703 T (P1), 702 T (包含層) 出土土器実測図 (1:3)

703 T 包含層

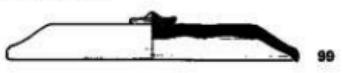


704 T 包含層

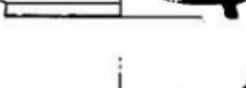
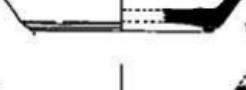
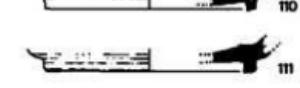
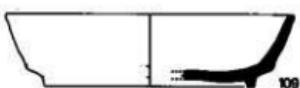
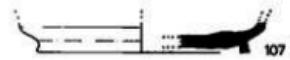
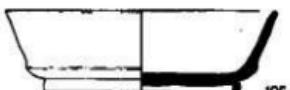


第10圖 703 T (包含層), 704 T (包含層) 出土土器実測図 (1:3)

705 T 包含層

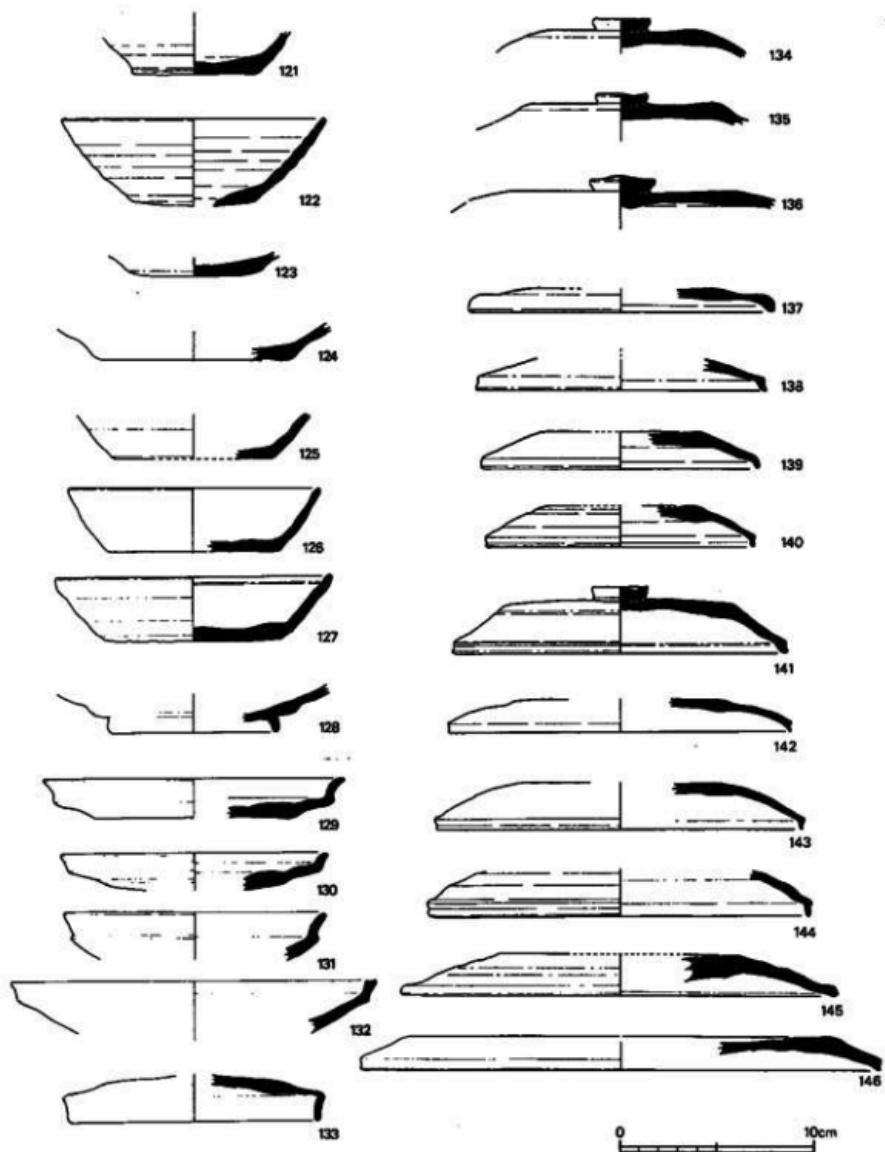


706 T 包含層

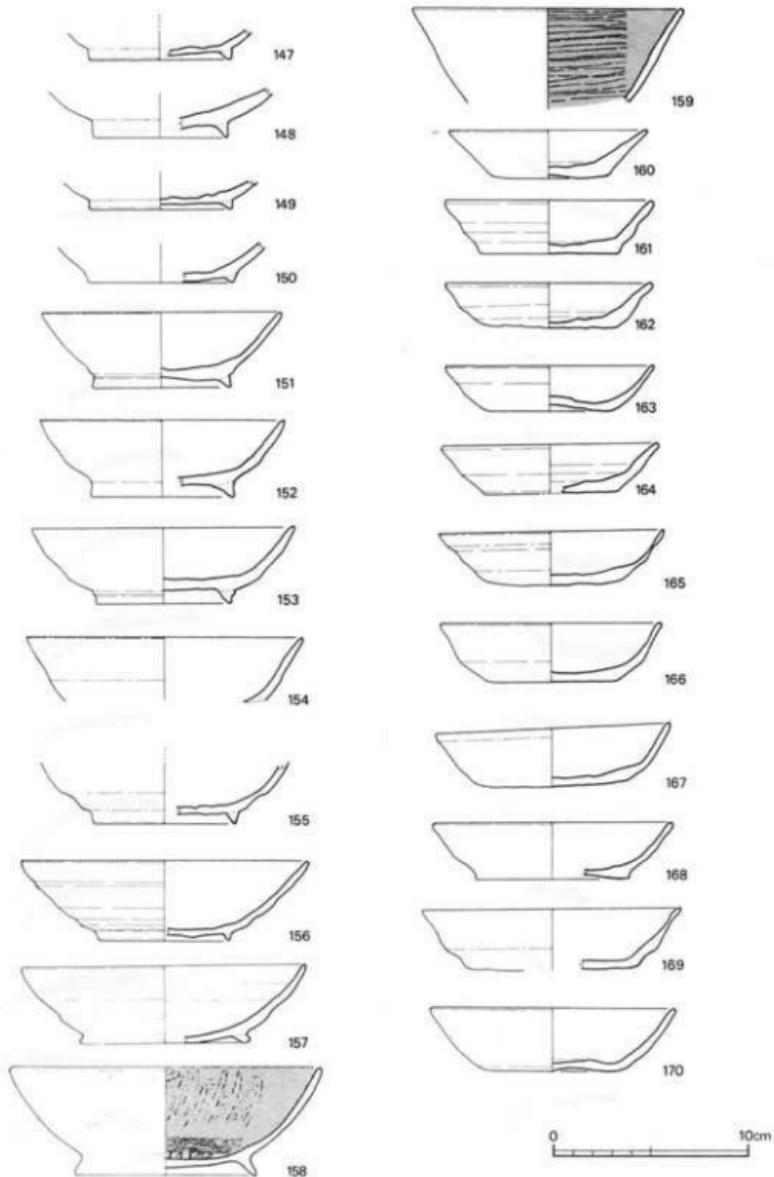


0 10cm

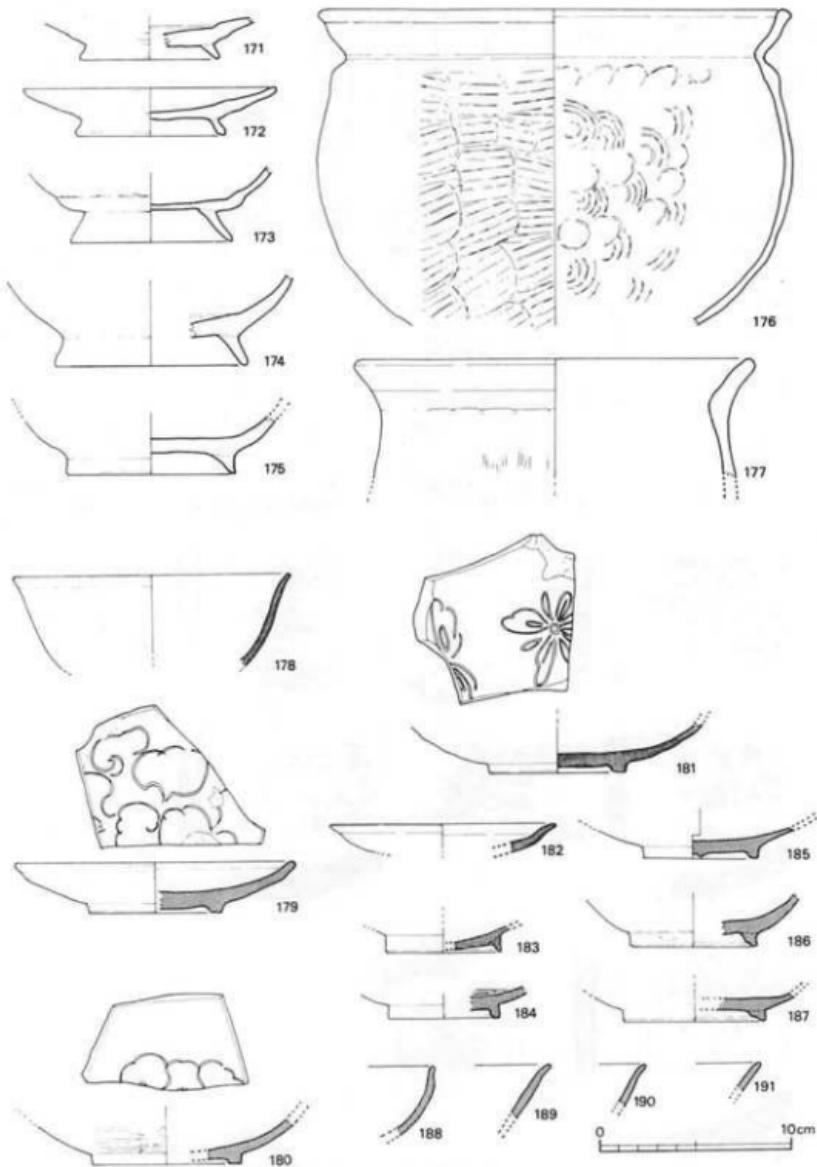
第11図 705 T (包含層), 706 T (包含層) 出土土器実測図 (1 : 3)



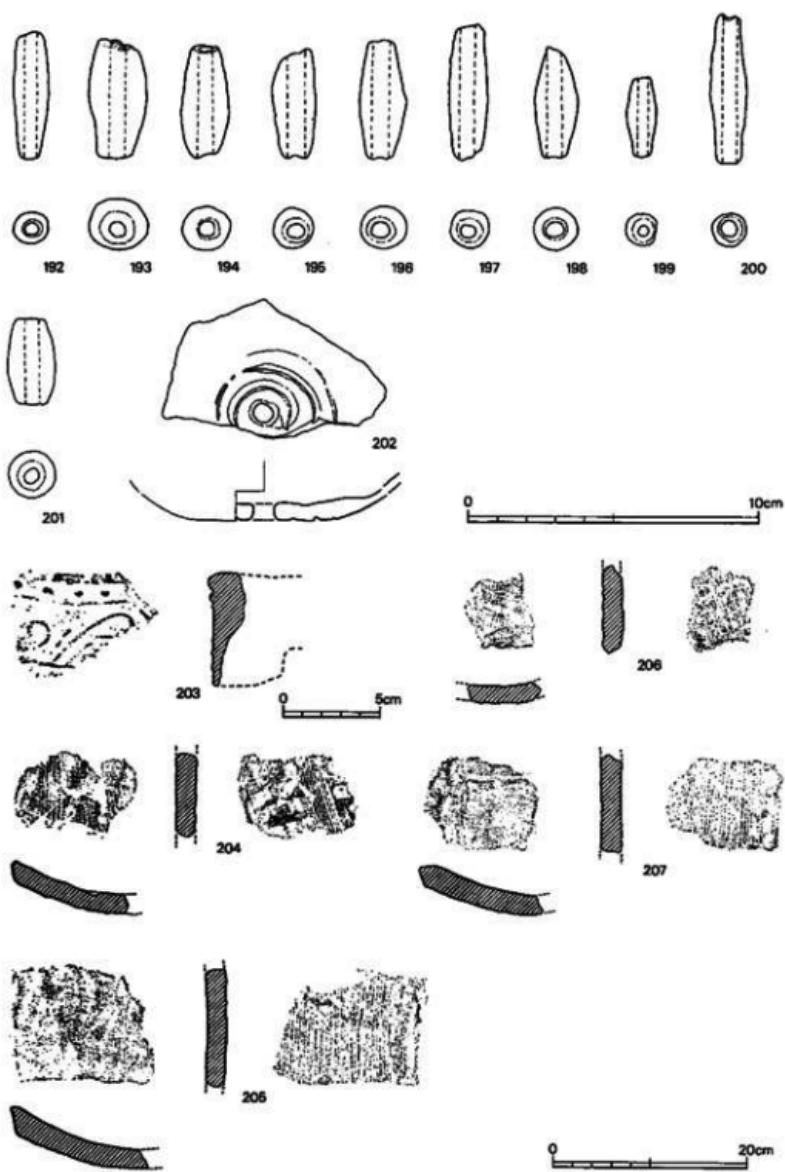
第12図 706T(包含層)出土土器実測図(1:3)



第13圖 706T包含層出土土器實測圖 (1:3)



第14図 706T (含層) 出土土器実測図 (1:3)



第15図 各トレンチ出土土製品 (1:2)・瓦類実測図 (1:3, 1:6)

## 出土土器観察表

出土場所	種類	器形分類	番号	法量		形態の特徴	成形調整の特徴
				口径	器高		
701T SK725	頸窓器	範A	1	—	—	断面連台形の小さな高台に内溝する体部をもつ。	内外面ともロクロナデ。底部外面はヘラ切りの後ナデ。灰白色を呈し焼成良好。
			2	13.2	—	体部下半に凹凸をもち、口縁部はわずかに外反する。	内外面ともロクロナデ。淡灰色を呈し、焼成良好。
		範B	3	15.0	4.9	体部下端が大きく外汚し、体部は直線的に立ち上がる。口縁部は外反しない。底部外面はやや上げ底風になり、外周の器壁がやや厚くなる。	体部内外面はロクロ目を残すロクロナデとし、底部外面は回転ヘラ切り。底部外面にわずかに板目状圧痕がある。
		範A	4	15.2	5.5	断面連三角形の小さな高台に大きく内溝する体部がつく。口縁部は「く」の字状に外反する。高台の先端は尖る。	体部内外面はロクロ目を残すロクロナデとし、底部外面は回転ヘラ切り。底部内面に直接重ね焼きの痕跡がある。
	土師器	Ⅲ A1-a	5	8.6	1.6	平坦あるいはやや上げ底風みの底部に直線的に立ち上がる口縁部をもつ。底部外面はヘラ切り。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面はヨコナデ。底部内面は不定方向のナデ。底部外面はヘラ切りの後不調整。淡茶褐色～淡黄褐色を呈し、焼成良好なものと軟質のものがある。
			6	9.0	1.3		
			7	9.6	1.3		
			8	9.3	1.6		
			9	9.1	1.1		
			10	9.0	1.2		
			11	9.8	1.2		
			12	8.0	0.9	やや丸みを帯びた底部外面に内溝する口縁部がつく。このため底部外面と口縁部の境は不明瞭である。底部外面はヘラ切り。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面はヨコナデ。底部内面は渦巻状のヨコナデ。底部外面はヘラ切りの後不調整。淡茶褐色～淡黄褐色を呈し、焼成良好なものと軟質のものがある。
			13	8.6	0.9		
			14	9.2	1.5		
	Ⅲ A1-b	Ⅲ A2	15	9.4	1.3		
			16	9.2	1.4		
			17	9.6	1.4		
			18	9.0	1.5		
			19	9.4	1.7		
			20	9.5	1.4		
			21	8.9	1.3		
			22	9.8	1.4		
			23	10.0	1.2		
			24	8.9	1.6	平坦な底部に内溝ぎみの口縁部をもつものが多い。底部外面は回転糸切り。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面はヨコナデ。底部内面は渦巻状のヨコナデ。底部外面は糸切りの後不調整。胎土に金雲母を含み淡茶褐色～茶褐色を呈する一群(24～28)と淡黄褐色を呈する一群(29～31)に分けられる。焼成良好なものと軟質のものがある。
			25	8.8	1.8		
			26	8.7	1.8		
			27	8.6	1.6		
			28	9.2	1.4		
			29	9.5	1.5		
			30	9.5	1.7		
			31	9.8	1.6		
	羽釜形土製品	32	5.8	3.8		平坦な底部に、やや張り出す副部がつく。口縁端部が尖り、やや下がった位置に脚がつく。底部外面はヘラ切りと思われる。	内外面ともヨコナデ。底部外面はヘラ切りの後ナデ。淡茶褐色を呈し胎土に砂粒が少ない。焼成はやや軟質。
			33	16.8	5.8	断面連三角形のしっかりした高台に内溝ぎみの体部がつく。高台端部はやや尖り、口縁部はゆるく外反する。	体部内外面はロクロ目を残すロクロナデ。底部外面はヘラ切りの後ナデとする。暗赤褐色を呈し、焼成良好。
	黒色土器A類	34	16.4	—		内溝ぎみの体部に、わずかに外反する口縁部がつく。	内外面ともヨコナデの後模いヘラミガキを施す。内面及び外側の口縁部が灰黒色を呈し、底部外面は灰白色を呈し、胎土は砂粒少なく、焼成良好。

出土場所	種類	器形分類	番号	法量 口径 器高	形態の特徴	成形調整の特徴
701T PA16	土師器	皿B	35	5.2 0.8	四凸のある底部に短い口縁部がつく。	口縁部内外面ともヨコナデ。底部外周は系切りの後ナデ。内面は一方向の強いナデ。
701T PR26	土師器	皿B	36	7.0 0.8	やや丸みをもった底部に短い口縁部がつく。	
701T PA6	土師器	杯	37	12.2 —	直線的に外傾する体部をもつ。	体部内外面は強いヨコナデ。明茶褐色を呈し、焼成良好。
701T 包含層 上層	須恵器	碗	38	— —	円盤状の平高台の周囲に小さな圓台がめぐる。内面の見込部の周囲に圓錐がめぐる。	底部外面はヘラ切りの後ナデ。乳白色を呈し、焼成良好。
		皿B	39	6.0 1.0	平坦な底部に小さな口縁部がつく	底部外面は、回転系切りの後不調整(39)、静止系切りの後不調整(40)、系切りの後板ナデ(41)、ナデ(42・43)。底部内面は溝巻状のヨコナデ(39・40)、一方向のナデ(41-43)。明茶褐色(39)、淡茶褐色(40-43)を呈し焼成良好。
			40	6.2 1.0		
			41	6.4 0.8		
			42	6.7 1.0		
			43	6.2 0.7		
		皿A1-b	44	8.8 0.8	ほぼ平坦な底部に、やや内湾する口縁部がつく。底部と口縁部の境は不明瞭。	口縁部内外面はヨコナデ。底部内面は溝巻状のヨコナデ、底部外周はヘラ切りの後不調整。淡黄褐色へ淡褐色を呈し、焼成良好。
			45	9.4 1.3		
		皿A2	46	9.4 1.2	平坦な底部に、水平方向にひろがる口縁部がつく。	口縁部内外面はヨコナデ。底部内面は溝巻状のヨコナデ、底部外周は回転系切りの後不調整。淡黄褐色を呈し焼成良好。
		杯	47	11.6 3.1	平坦な底部に、直線的に外傾する体部がつく。	体部内外面はロクロ目を残すロクロナデ。底部外周はヘラ切りで板目状の圧痕が残る。
		碗	48	— —	断面長方形に近い高台に内湾する体部がつく。	調整は不明。(体部内外面はナデか?) 淡褐色を呈し、焼成軟質。
中國製 磁器	四耳壺 (白磁)	49	10.7 —	直立する頭部にU字状に反転する口縁部がつく。	灰白色(釉)、淡灰白色(胎土)。	
		50	— —	体部内面に片切形の文様をもつ。	淡緑灰色(釉)、灰白色(胎土)。	
		51	— —	体部内面に片切形の文様をもつ。	緑灰褐色(釉)、淡灰褐色(胎土)。	
		52	— —	見込部に蓮草状様のスタンプ文をもつ。体部外周に蓮弁を彫刻する。	暗緑灰色(釉)、灰白色(胎土)。	
701T 包含層 下層	須恵器	長頸壺	53	— —	体部は直線的で、肩部は屈曲して明瞭な稜をなす。高台は外に聞く。	体部内外面ともロクロナデを施すが、内面は難。底部内面は不定方向ナデ。颈部外周に深緑色自然輪。他は淡灰褐色を呈し、焼成良好。
		壺	54	22.2 —	口縁端部は丸くおさめる。壺部下方外周に鈍い稜がめぐる。	内外面ともロクロナデ。淡灰褐色を呈し、焼成良好。
		壺	55	— —	肩部には3条の浅い凹縞で区画された2段のヘラ彫き斜行縞の文様帶がめぐる。	内面面ともロクロナデ。外周は暗灰褐色自然輪、内面は淡灰褐色を呈し、焼成良好。
			56	— —	外開きの体部と平底の境界の下方に瘤部の平坦な高台がつく。	内面面ともロクロナデ。高台は貼り付け、灰色を呈し、焼成良好。
			57	— —	底部外周に凹凸のある丸底の壺の底部と思われる。	底部外周は指オサエの残るヘラケズリ。内面はヨコナデ。灰白色へ淡褐色を呈し、焼成はやや軟質。
			58	11.6 3.5	垂直に下がる口縁部から強く屈曲して天井部となる。	天井部外周ヘラ切り不調整。他はロクロナデ。外周は深緑色自然輪、灰色を呈し、焼成良好。
			59	11.0 3.1	立ち上がりは非常に矮小化している。	口縁部から天井部周辺外周はヘラケズリ。天井部中央はヘラ切りの後ナデ。灰白色を呈し、焼成良好。

出土場所	種類	器形分類	番号	法量		形態の特徴	成形調整の特徴
				口径	器高		
701T 包含層 下層	須恵器	盃	60	-	-	平坦な天井部に偏平なつまみがつく。	天井部外面へラケズリ、内面ヨコナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
			61	13.6	2.4	口縁部は外に向く、天井部は平坦で偏平なつまみがつく。	天井部外面へラケズリ、内面仕上げナデ。口縁部内外面はロクロナデ。灰白色を呈し、焼成はやや軟質。
			62	15.2	2.5	口縁部は外に向く、天井部は平坦で偏平なつまみがつく。	内外面とも調整不明。白色を呈し焼成不良。
		杯	63	12.0	-	立ち上がりは矮小化して、内傾する。(盃の可能性もある。)	外面ともヨコナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
			64	14.0	4.2	体部から口縁部にかけて、直線的に外に向く。底部平底。	内外面ともロクロナデ。底部外面はヘラ切りの後相いナデ。灰白色を呈し、焼成はやや軟質。
			65	-	-	体部と底部の境の屈曲からやや内寄りに内湾ぎみの高台がつく。	底部外面は、ロクロナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
		高杯	66	-	-		淡灰色を呈し、焼成良好。
		土師器	67	-	-	杯部・脚部とも器壁は薄手である。	内外面とも調整は不明。淡黄褐色を呈し、焼成良好。
			68	24.8	-	大きく外に向く口縁部から、なだらかに体部となる。	内外面とも調整は不明。淡茶褐色を呈し、焼成良好。
703T P1	須恵器	盃	69	4.0	2.0	平坦な天井部から屈曲して口縁部となる。口縁部は強く屈曲して下方へのびる。	天井部は回転ヘラケズリ、淡灰色を呈し、焼成良好。
702T 包含層	須恵器	盃	70	20.6	-	口縁部の内側は純い段をなしている。	内外面ともロクロナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
			71	13.8	3.2	体部は内湾ぎみに外に向き、底部は平底。	内外面とも調整は不明。白色を呈し、焼成良好。
			72	-	-	底部と体部の境付近に高台がつく。	底部外面はヘラ切りの後ナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
			73	12.8	4.1	体部は直線的に外に向く。口縁部付近でやや外反する。底部と体部の境に高台がつく。	底部外面はヘラ切り。灰白色を呈し、焼成良好。
		碗	74	15.0	6.5	ロクロによる凹凸のある体部に口縁部は「く」の字状に外反する。底部と体部の境に高台がつく。	内外面ともロクロナデ。底部外面はヘラ切りの後相いナデ。淡茶褐色を呈し、焼成良好。
			75	12.8	-	体部から純く屈曲して口縁部は外に向く。	内外面ともロクロナデ。灰色を呈し、焼成良好。
			76	-	-	焼成前に脚基部に2方向から小孔を穿つ。	杯部の底部内面は不定方向のナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
		土師器	77	-	-	脚部は大きく外に向く。	杯部の底部内面は不定方向のナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
			78	-	-	体部は内湾ぎみの外上方にのびる高台は「ハ」の字状に外に向く。	体部内面は粗いハラミキ。底部外面はヘラ切りの後ナデ。淡橙色を呈し、焼成良好。
			79	-	-	体部は内湾ぎみの外上方にのびる高台は「ハ」の字状に外に向く。	底部内面はヨコナデ。底部外面はヘラ切りの後ナデ。淡茶褐色を呈し、焼成はやや軟質。
703T 包含層	須恵器	盃	80	-	-	体部は直線的に外上方へのびる。底部は平底。	体部は内外面ともロクロナデ。底部外面はヘラ切りの後ナデ。淡灰色を呈し、焼成良好。
		盃	81	23.4	-	口縁部は純く屈曲する。	内外面ともロクロナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
		杯	82	10.4	2.6	体部は直線的に外に向く。底部は平底。	底部外面はヘラ切りの後ナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
			83	11.4	3.2	体部は直線的に外に向く。体部と底部との境界には明瞭な棱がめぐりそのやや下方内寄りに高台がつく。	底部外面はヘラ切りの後ナデ。灰白色を呈し、焼成良好。

出土場所	種類	器形分類	番号	法量		形態の特徴	底形調整の特徴
				口径	器高		
703T 包含層	須恵器	杯	84	—	—	高台端部は明瞭な凹面をなす。	底面外側はヘラ切りの後ナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
			85	—	—	器壁はやや厚手で高台のつくりは全体的に鈍い。	底面内面はロクロナデ。外側はナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
	中国製 磁器	碗	86	20.0	—	口縁端部は小さく玉縁状に肥厚する。	内外面ともロクロナデの後薄く施釉。胎土は淡灰色。釉は灰白色。焼成良好。
			87	12.8	—	口縁端部は平坦面をつくる。	体部外側は平行タタキ。内面は同心円スタンプが残る。淡灰色～淡褐色を呈し、焼成良好。
			88	—	—	平坦な天井部に偏平なつまみがつく。	外側は自然輪のため調整不明。淡灰色を呈し、焼成良好。
			89	22.8	—	口縁端部は強く屈曲して外下方にのび、端部下面はわずかに凹面をなす。	内外面ともロクロナデ。外側は淡灰色。内面は黒灰色を呈し、焼成良好。
704T 包含層	須恵器	盃	90	11.8	4.4	立ち上がりは上半が屈曲して、垂直近くなる。受部は厚く内済する。	底面外側は粗いヘラケズリ。その他はロクロナデ。淡灰色を呈し、焼成良好。
			91	11.4	3.7	立ち上がりは内傾する。受部は厚く内済する。底面部にヘラ状工具による朱絞あり（ヘラ記号か？）	底面外側は粗いヘラケズリ。その他の部分はヨコナデ。暗灰色を呈し、焼成良好。
			92	12.6	—	立ち上がりは矮小化し、上部は垂直直ぎみになる。	底面外側はヘラ切りの後ナデ。暗灰色を呈し、焼成良好。
			93	—	—	体部は屈曲して外反直ぎみにのび、高台は小さく低く、「ハ」の字状に聞く。	底面外側はヘラ切りの後ナデ。暗灰色を呈し、焼成良好。
			94	—	—	体部は内済直ぎみの外上方にのび、貼付の平高台の外周がわずかに隆起する。	底面外側はヘラ切り。灰色を呈し、焼成良好。
			95	—	—	内済する体部につくりの難な平高台がつく。	底面外側はヘラ切りの後ナデ。他はヨコナデ。灰色を呈し、焼成良好。
	土師器	高杯	96	—	—	脚部は比較的大く、外開き。	内外面ともロクロナデ。淡灰色を呈し、焼成良好。
		甕	97	21.6	—	口縁部は大きめ外反する。	体部外側はハケメ、内面はヘラケズリ。淡茶褐色を呈し、焼成良好。
		瓶	98	—	—	把手部は扁平で、斜上方へのびる	体部内面はヘラケズリ。茶褐色を呈し、焼成良好。
705T 包含層	須恵器	盃	99	13.8	—	平坦な天井部に、中心が盛り上がる偏平なつまみがつく。口縁部は屈曲して垂下する。	天井部外側は回転ヘラケズリ。内面はヨコナデの後仕上げナデ。淡灰色を呈し、焼成良好。
			100	12.8	3.1	体部は直線的に外上方にのび、口縁部は内側に肥厚する。	底部外側は、ヘラ切りの後ナデ。暗灰色を呈し、焼成良好。
		鉢	101	30.4	—	口縁部は屈曲して、端面は上方に拡張する広口の鉢。	内外面ともヨコナデ。暗褐色を呈し、焼成良好。
		杯A1	102	—	—	底部と体部の境が明瞭に屈曲して棱をなす。体部は直線的に外上方にのびる。底部外周よりやや内側に低い高台がつく。高台端部下面は浅い凹面がめぐるもの（102～109）と平坦なもの（110～111）がある。	底部外側はヘラ切りの後ロクロナデ。その他はロクロナデ。暗褐色～淡灰色を呈し、焼成良好。
			103	—	—		
			104	—	—		
			105	—	—		
			106	—	—		
			107	—	—		
			108	14.0	4.1		
			109	14.6	3.7		
			110	—	—		
			111	—	—		

出土場所	種類	器形分類	番号	法 盤		形態の特徴	成形調整の特徴
				口径	器高		
706T 包含層	須恵器	杯A2	112	—	—	底部と体部の貼付近に小さな高台を貼付け。体部は直線的に聞く。高台は断面台形及び複形を呈する。	底部外面はヘラ切りの後ナデ。淡灰色～暗灰色を呈し、焼成良好。
			113	—	—		
			114	—	—		
			115	—	—		
		杯A3	116	—	—	底部のやや内側に高台を貼付け、体部はゆるやか内湾ぎみに立ち上がる。高台は断面稍形で「ハ」の字状に聞く。高台径の小さなもの(116, 117)と大きなもの(118-120)がある。	底部外面はヘラ切りの後ナデ。灰～灰白色を呈し、焼成良好。
			117	—	—		
			118	—	—		
			119	—	—		
			120	—	—		
		碗	121	—	—	平底の碗で、体部は内湾ぎみに外上方へのびる。体部にはロクロナデの凹凸がのこる。底部外面は外方へ張り出すもの(122, 123)と平坦なもの(121, 125)、やや上げ底風となるもの(124)がある。	底部外面はヘラ切りの後ナデ。体部はロクロナデ。淡灰色～暗灰色を呈し、焼成良好。
			122	13.4	4.5		
			123	—	—		
			124	—	—		
			125	—	—		
		杯B	126	12.8	3.3	平坦な底部に直線的な体部がつく	底部外面はヘラ切りの後不調整。灰～暗青灰色を呈し、焼成良好。
			127	14.4	3.3		
			128	—	—	体部外面にゆるやかな屈曲をもち高台はやや高い。	内外面ともロクロナデ。暗灰色を呈し、焼成良好。
		盤	129	12.6	—	平坦な底部からゆるやかに屈曲する体部がつづき、強く屈曲して外反する口縁部がつく。	底部外面は不調整。その他はロクロナデ。暗灰色を呈し、焼成良好。
			130	13.4	—	やや内湾する底部に短い口縁部がつく。	底部外面はヘラケズリ、他はロクロナデ。淡灰色を呈し、焼成良好。
			131	13.6	—	内湾する体部から強く屈曲して外反する口縁部がつく。高杯の杯部になる可能性がある。	内外面ともロクロナデ。灰色を呈し、焼成良好。
			132	15.4	—	直線的に聞く体部に「く」の字状に屈曲する短い口縁部がつく。口縁端面は浅く凹む。	内外面ともロクロナデ。灰色を呈し、焼成良好。
		蓋A	133	12.8	—	ゆるやかに屈曲する天井部に「T」字状に屈曲して垂下する口縁部がつく。	天井部外面は調整不明。その他はロクロナデ。暗青灰色を呈し、焼成良好。
			134	—	—	平坦な天井部に偏平なつまみがつく。	天井部外面は回転ヘラケズリの後ロクロナデ。淡灰色～暗灰色を呈し、焼成良好。
			135	—	—		
		蓋B	136	—	—		
			137	15.6	—	天井部はやや丸みのある平坦面をなし、口縁部は丸くおさめる。	天井部外面はナデ。灰白色を呈し、焼成はやや軟質。
			138	15.0	—	天井部は平坦面をなし、口縁部は強く屈曲して端部が嘴状に尖る。	天井部外面はヘラ切りの後ロクロナデ。淡灰色～暗青灰色を呈し、焼成良好。
			139	14.2	—		
			140	13.8	—		
			141	17.2	3.4		
			142	17.6	—		
			143	18.8	—		
			144	19.4	—	口縁部は強く屈曲してやや長く、端部は丸くおさめる。	内外面ともロクロナデ。灰色を呈し、焼成良好。
			145	22.6	—	天井部は平坦面をなし、口縁部はわずかに屈曲するのみ。端部は丸くおさめる。天井部の器壁が厚い。	天井部外面は回転ヘラケズリの後ナデ。灰白色を呈し、焼成良好。
			146	26.8	—	天井部は平坦面をなし、口縁部はわずかに垂下するのみ。	天井部外面はヘラ切り。暗灰色を呈し、焼成良好。

出土場所	種類	器形分類	番号	法量		形態の特徴	成形調整の特徴
				口径	器高		
706T 包含層	土師器	杯A	147	—	—	内湾する体部に口縁部は外反せず 高台は断面三角形を呈する。体部下 半にロクロナデによる凹凸をもつも のもある。	底部外面はハラ切り。その後の内 外面はロクロナデとする。淡茶褐色 ～暗茶褐色を呈し、焼成良好。
			148	—	—		
			149	—	—		
			150	—	—		
			151	12.4	4.9		
			152	12.5	4.9		
			153	13.4	4.9		
			154	14.2	—		
			155	—	—		
			156	14.6	4.1		
			157	14.4	4.0	内湾する体部に口縁部は外反せず 高台は「ハ」の字状にひらく。	調整不明。灰白色を呈し、焼成良 好。
黒色土器 A類		碗	158	15.6	5.5	体部は内湾ざみにのびる。高台は 「ハ」の字状にひらく。	底部外面はハラ切りの後ナデ。体 部内面は横方向のヘラミガキの後縱 方向のヘラミガキ。体部外面は粗い ヘラミガキ。底部内面はジグザグ状 のヘラミガキ。内面は黒色、外面は 淡茶褐色を呈し、焼成良好。胎土に砂 粒を多く含む。
			159	13.8	—	体部は直線的にひらく。口縁内面 に不明瞭な凹溝が1条めぐる。	内面はヘラミガキ。外面はナデ。 内面は黒色、外面は淡茶褐色を呈し、 焼成良好。胎土に砂粒を多く含む。
土師器		杯B	160	10.0	2.5	平坦な底部に直線的にひらく体部 をもつもの(160～164)とやや内湾 ざみの体部をもつもの(165～170) がある。	底部外面はハラ切りの後ナデ。 底部外面に板目状圧痕の残るものも ある。淡茶褐色～淡茶褐色を呈し焼 成良好なものが多い。
			161	10.4	2.8		
			162	10.6	2.3		
			163	10.6	2.3		
			164	11.0	2.5		
			165	11.6	2.8		
			166	11.4	3.0		
			167	12.1	3.0		
			168	10.2	2.9		
			169	13.2	—		
			170	16.4	3.2		
黒色土器 B類		皿	171	—	—	高台は「ハ」の字状に開き、体部 は直線的に外方にのびる。	底部外面はナデ。淡黄褐色を呈し、 焼成良好。
			172	13.0	2.5		
		碗	173	—	—	体部は下端に屈曲をもち内湾する 高台は大きく「ハ」の字状に開く。	調整不明。淡黄褐色を呈し、焼成 良好。
			174	—	—	体部はゆるやかに内湾し、高台は 大きく「ハ」の字状に開く。	調整不明。暗灰色を呈し、焼成良 好。
			175	—	—	体部はゆるやかに内湾し、高台は 断面三角形を呈する。	調整不明。淡黄褐色を呈し、焼成 良好。
		甕	176	23.6	—	球形の体部に、短く聞く口縁部が つく。口縁端部は球形に肥厚する。	体部内面は指オサエ・ナデ。同心 円状の当具の跡痕が残る。外面は 平行タタキの後ナデ。暗茶褐色を呈 し、焼成良好。体部外面に爆付帯。 体部内面はナデ、外面はハケメ。 暗褐色を呈し、焼成良好。
			177	20.0	—	口縁部はゆるやかに外反する。	
輪胎陶器		瓶	178	14.4	—	ゆるやかに内湾する体部に、わざ かに外反する口縁部がつく。	内外面ともロクロナデ。輪：淡綠 色、胎土：暗灰色。焼成硬質。
		皿	179	14.4	2.6	口縁部はやや屈曲して、端部は丸 くおさめる。高台は断面台形の削出 高台。外底面にも輪がかかる。内面 に花文を施す。	口縁部外面はロクロナデ。底部 内面はヘラミガキ。底部外面はハラ ケズリ。輪：淡黃緑色、胎土：淡黃 褐色。焼成はやや軟質。

出土場所	種類	器形分類	番号	法量		形態の特徴	成形調整の特徴
				口径	器高		
706T 包含層	縦陶器	皿	180	—	—	ゆるやかに内湾する体部に、高台は断面格形の削出高台がつく。外底面にも輪をかける。内面に花文を施刻する。	内外面ともヘラミガキ。釉：暗灰緑色。胎土：暗灰色。焼成良好。
			181	—	—	口縁部はわずかに屈曲をもち、ゆるやかに内湾する体部に断面台形の削出高台がつく。外底面にも輪をかける。内面に花文を施刻する。	内面はヘラミガキ。外面はロクロナデの後程いヘラミガキ。釉：淡黄緑色。胎土：淡黄褐色。焼成はやや軟質。
			182	11.6	—	口縁部はわずかに屈曲をもち、端部はやや外反する。	内面はロクロナデ、外面はロクロナデの後程いヘラミガキ。釉：暗灰緑色。胎土：暗灰褐色。焼成軟質。
			183	—	—	やや細い削出高台をもつ。外底面には輪をかけず。	高台接地面内面を斜めに削りとする。釉：暗灰緑色。胎土：暗灰褐色。焼成硬質。
			184	—	—	断面格形の削出高台をもつ。外底面には輪をかけず。底部内面に直接重ね焼きの痕跡がある。	内外面ともヘラミガキ。釉：淡緑色。胎土：淡灰色。焼成硬質。
			185	—	—	断面台形の削出高台をもつ。外底面には輪をかけず。底部外側中央にへそ状の突起がある。	内外面ともヘラミガキ。釉：明緑色。胎土：淡灰色で稍良。焼成硬質。
			186	—	—	内湾する体部に貼付高台をもつ。外底面には輪をかけず。高台内端に段をもつ。底部内面周縁には浅い凹縫がめぐる。	内外面ともロクロナデ。釉：淡緑色。胎土：灰色で稍良。焼成軟質。
			187	—	—	高台内端に段をもつ貼付高台で、外底面には輪をかけず。	釉の剥落が激しい。釉：濃緑色。胎土：淡褐色。焼成軟質。
			188	—	—	内湾する体部に口縁部はゆるやかに外反する。	内外面ともロクロナデ。釉：淡緑色。胎土：暗青褐色。焼成硬質。
			189	—	—	横の口縁部で、口縁端部がゆるく外反するもの(189)、口縁外端が肥厚するもの(190)などがある。	外面ともヘラミガキ(189)、内外面ともロクロナデ(190, 191)。釉：淡緑色。胎土：灰白色。

## VII. まとめ

今回の調査は、市街地の北方に位置する出口町地区を中心に実施した。ここは、昨年度までに多数の遺構・遺物を検出している元町地区の西方約1kmの地点に位置しており、國府城の西限を追求することも目的の一つであった。調査区は、地区の大部分が市街化していることから市街地の北方からのびる低丘陵裾部に集中して設定した。調査の結果、辻横田地区(701T~705T)、辻砂場地区(706T)から平安時代を中心とする豊富な遺物が出土した。ここでは、遺物を中心に概要をまとめておく。

### 1. 遺構

701Tで、土塙(SK725)と柱穴群を検出したが、柱穴群は建物としてのまとまりはつかめなかった。土器類が一括して投棄されていた土塙は、須恵器・土師器・黒色土器の椀・皿類を投棄した浅い掘込みで、土器類のなかに羽釜形土製品が1点含まれており、何らかの祭祀に関連するものであろう。時期的には、土器類の特徴から平安時代中頃(10世紀後半~11世紀初頭頃)と考えられる。一方、柱穴群は出土した土器や掘り込まれた層位などから、SK725より新しく中世の遺構と思われる。柱穴内から出土した土器と包含層上層から出土した土器は、SK725に併行すると思われる一部のもの(第8図38・44~46)を除いてほぼ同時期のものと思われ、包含層上層出土の青磁などの年代観から<sup>(1)</sup>13世紀を中心とする時期と考えられる。

702・703Tの地山上に掘り込まれた柱穴群は、701Tのものに比べて規模が大きく柱穴内から出土した土器から奈良時代(8世紀)の建物となるものであろう。この時期の遺物は701Tの包含層下層や704・705Tでも散見され、また702・703Tの西方約100mの地点で<sup>(2)</sup>奈良時代の土器窯が調査されている。このことから、辻地区の高台には奈良時代の遺構が広がっている可能性が高い。

### 2. 遺物

今回の出土遺物の中で、特に注目されるものはSK725と706T包含層出土の資料であろう。SK725出土土器は、須恵器椀、土師器皿・椀、黒色土器A類椀で構成されている。須恵器椀には、高台の付くもの(A類)と付かないもの(B類)があり、A類のうち(4)は土師器椀(33)と高台や全体の形が類似している。須恵器椀(4)の形態は、備後国府跡のこれまでの調査で比較的よくみられるものであり、第6次調査のSE618出土の椀(54)と同一系統のものである。SK725出土のものは、SE618のものに比べて、器高が低く、高

台径が小さく、口縁部の外反が強いなど明らかにSE618に先行するものと考えられる。一方、土師器碗（33）は、形態的に備後地方や周辺部では類例が知られていないものである。<sup>(4)</sup> 形態的に強いてあげれば東海系の灰釉陶器（折戸53号窯期ぐらいか）<sup>(5)</sup> に類似しているように思われる。土師器皿については、口径8~10cm、器高1~2cmの小皿ばかりである。これらの皿には、底部がヘラ切りのもの（A1類）と糸切りのもの（A2類）があり、A1類は底部と口縁部の境が明瞭に屈曲するもの（A1-a類）と全般的に彎曲して底部と口縁部の境が明瞭でないもの（A1-b類）に二分される。A1-b類については、これまで備後地方ではまとまった出土例がなく、備後国府で11世紀代と考えられているSE618の皿に比べて、法量の点でやや大きい。このようなことから、SK725の土師器皿は、備後地方の土師器小皿としては古いタイプのものであろう。これらSK725の土器群の年代については、当地域の平安時代の土器編年が明確ではなく困難であるが、福山市ザブ遺跡No.3土塙の9世紀後半~10世紀前半に位置づけられる土器群と比べて、器種構成・形態などから明らかに後出のものである。一方、備後国府跡で11世紀代に位置づけられるSE618出土土器群に比べて、全器種において先行する形態をもっていることから、SK725の土器群の年代は、大雜把ではあるが、10世紀後半~11世紀初頭ぐらいに位置づけておきたい。

次に、706T包含層出土の土器群については、包含層が厚さ1m前後あり層位も明確に区分できなかったため、土器の種類や器形は多様であるが年代にかなり幅があることが考えられる。これらの中で、年代推定の手がかりとなるものは綠釉陶器、須恵器などであろう。綠釉陶器には、京都産で陰刻花文を施し、全面施釉の百瀬編年のB期（9世紀後半~10世紀初頭）のもの（第14図179~182、190、191）からC期（10世紀前半~10世紀後半）のもの（第14図183~185、189）までを含み、一部に10世紀後半頃の近江産のもの（第14図178、186~188）が混じる。一方、須恵器には、久井町小林1号窯跡<sup>(6)</sup>（8世紀前半）に類似した杯A3類（第11図116~120）、久井町大仙沖窯跡<sup>(7)</sup>（8世紀後半~9世紀初頭）に類似した杯A1類（第11図102~111）、東広島市安芸国分寺東方遺跡<sup>(8)</sup>（露掛西地区）・神辺町亀山遺跡312T包含層（ともに9世紀後半~10世紀前半）に類似した杯A2類（第11図112~117）、さらに今回調査したSK725（10世紀後半~11世紀初頭）の碗B（第7図3）に類似した碗（第12図124）などが抽出できる。また、土師器の杯類の多くは、福山市ザブ遺跡のNo.3土塙に類似している。以上のことから、706T包含層の土器は8世紀前半から11世紀初頭ぐらいまでのものを含み、9世紀後半~10世紀後半にかけて綠釉陶器が伴うようである。

以上、今回出土した土器群について大雑把な年代的位置づけを行ったが、第6次調査までの成果を援用すれば、平安時代の土器編年は、ザブ遺跡No.3土塁（9世紀後半～10世紀前半）→（+）→備後國府跡SK725（10世紀後半～11世紀初頭）→SE618（11世紀前半）→SE401（11世紀後半～12世紀初頭）→SD608（12世紀前半）という流れが考えられる。このなかで画期を求めれば、須恵器椀と土師器皿・杯・椀という供膳形態が確立するSE401（11世紀後半頃）となろうか。また、土師器のヘラ切り技法から糸切り技法への転換は、現状ではSK725の時期（10世紀後半）と考えておく。これらの詳細については、今後資料の蓄積の中で改めて検討したい。

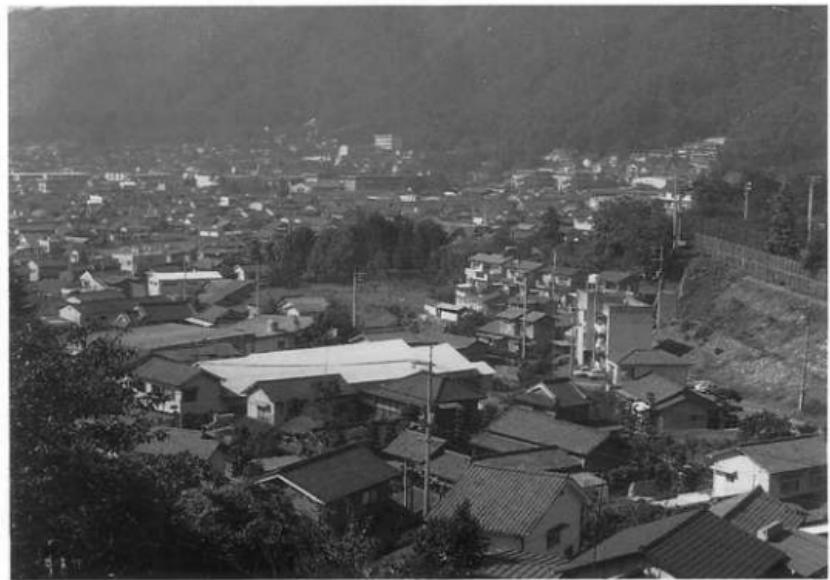
## 註

- (1) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集4 昭和53(1978)年。
- (2) 昭和63(1988)年9月市教委調査。
- (3) 広島県立埋蔵文化財センター「備後國府跡」—推定地にかかる第6次調査概報—昭和63(1988)年。
- (4) 神辺町渡瀬遺跡に類似したものがある。広島県教育委員会(財)広島県埋蔵文化財調査センター「渡瀬遺跡」昭和57(1982)年。の第22回109(P.28)
- (5) 愛知県教育委員会「愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)」昭和58(1983)年。
- (6) 広島県教育委員会「山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告」昭和48(1973)年。
- (7) 百瀬正恒「平安時代の綠釉陶器」「中近世土器の基礎研究Ⅱ」昭和61(1986)年。百瀬氏には実際に遺物を見て頂いて御教示を受けた。
- (8) (財)広島県埋蔵文化財調査センター「小林1号窯跡発掘調査報告」昭和59(1984)年。
- (9) 向田裕始「大仙沖窯跡群」「広島県の主要遺跡(2)」「芸備」第12集 昭和57(1982)年。
- (10) 広島県教育委員会「安芸国府尼寺跡」—伝承地にかかる第3次調査概報—昭和55(1980)年。
- (11) 広島県立埋蔵文化財センター「亀山遺跡」—第3次発掘調査概報—昭和59(1984)年。
- 02 註(3)と同じ。

# 図 版



a. 調査区遠景（北東から）



b. 調査区近景 辻横田地区（北東から）



a. 701 T 遺構検出状況（北東から）



b. 702 T 遺構検出状況（北東から）



a. 703 T 遺構検出状況（南西から）



b. 704 T 遺構検出状況（北東から）

a. SK710  
検出状況  
(北西から)

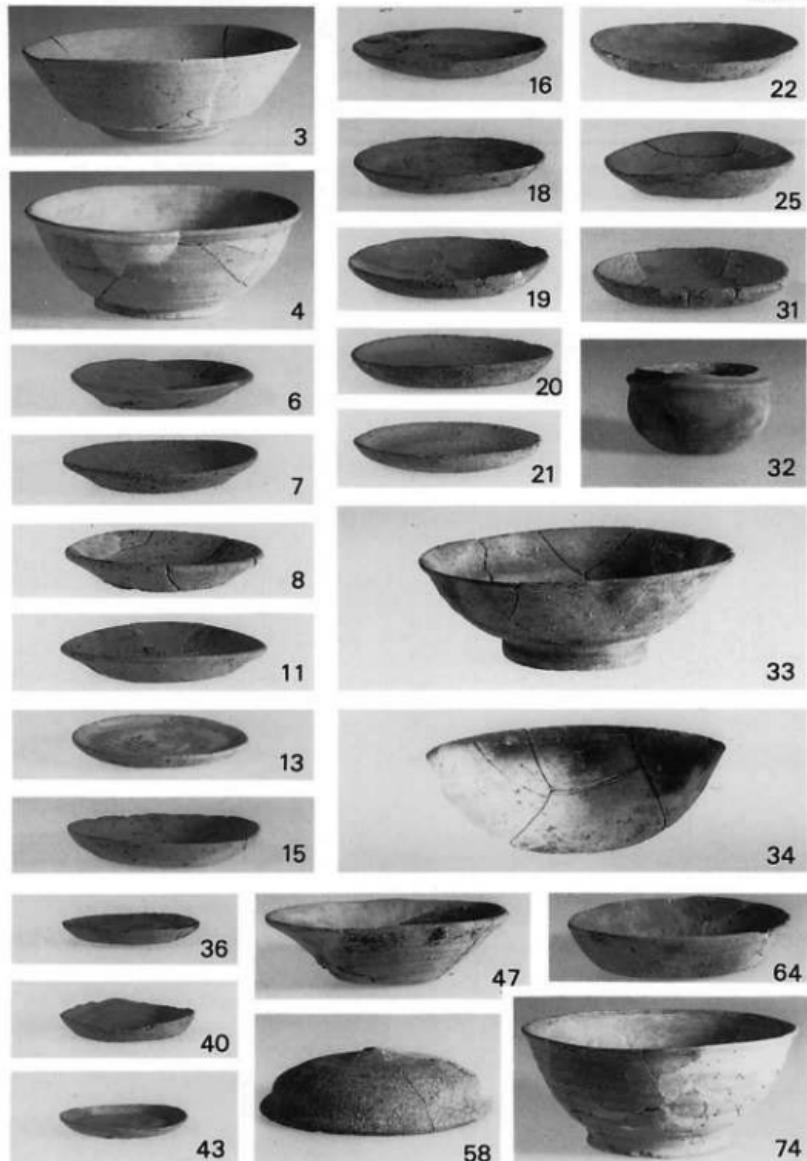


b. SK725  
遺物出土状況  
(北西から)



c. 同上  
(北東から)





圖版 6



100



108



109



127



151



152



156



158



161



167



176



179



180



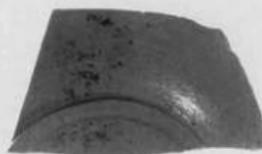
181



185



179



180

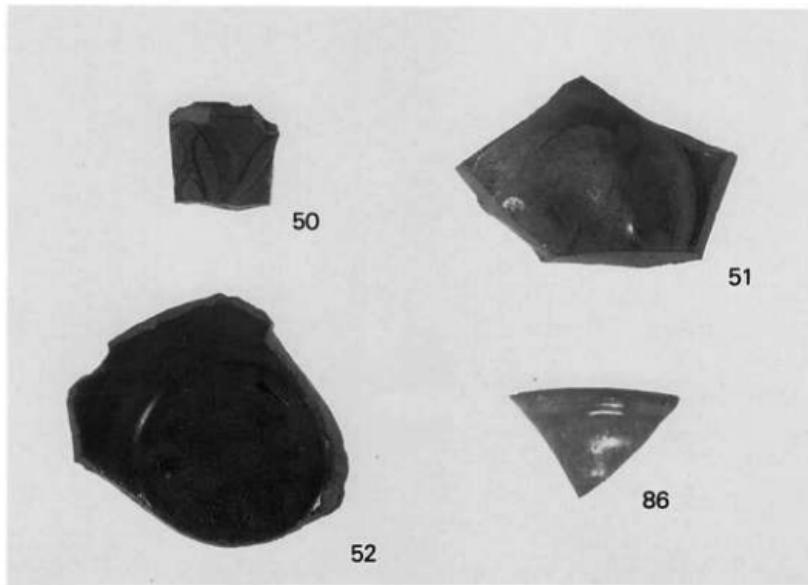
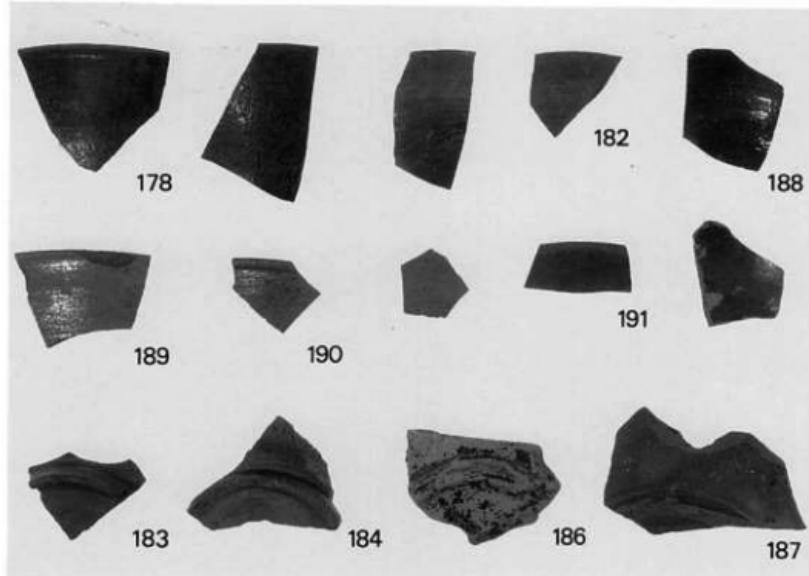


181



185

出土遺物3 (緑釉陶器)



出土遺物 4 (上：緑釉陶器、下：中国製磁器)

# 備後国府跡

—推定地にかかる第7次調査概報—

1989

平成元(1989)年3月31日発行

編集 広島県立埋蔵文化財センター

広島市西区観音新町4-8-49

電話 (082) 295-5451

発行 広島県教育委員会

印刷 株式会社 ニシキプリント